高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第6冊

奥の坊遺跡群Ⅵ

（奥の坊遺跡Ⅴ区）

2007年11月

高松市教育委員会

奥の坊遺跡Ⅴ区空中写真(北から)

奥の坊遺跡Ⅴ区完掘状況（北から）

SH52001完掘状況（南から）

SD51001(N)小壺出土状況

例　言

1．本報告書は，高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊で，高松市高松町に所在する奥の坊遺跡Ⅴ区（おくのぼういせきⅤく）の報告を収録した。

2．発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調 査 地：高松市高松町奥ノ坊
発掘調査：平成11年5月28日～7月13日
整理作業：平成19年1月4日～11月30日

3．発掘調査から整理作業及び報告書編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。

4．発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々から御教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）
香川県教育委員会，古高松土地改良区，地元自治会，地元水利組合

5．発掘調査から整理作業，報告書執筆まで下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。(敬称略)
信吉純恵・大野宏和・川部浩司・堀田ゆず（当時徳島文理大学），末光甲止（当時讃岐文化遺産研究会）

6．本調査に関連して，以下の業務を業務委託発注により実施した。
航空写真測量　　アジア航測㈱
遺物写真撮影　　西大寺フォト
木製品保存処理　　㈱吉田生物研究所

7．挿図として，国土地理院発行1/25,000地形図「高松北部」「高松南部」「五剣山」「志度」を一部改変して使用した。

8．本報告の高度値は海抜高を表し，方位は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）の北を示す。

9．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡　　SD：溝　　SE：井戸・水溜め場　　SH：竪穴住居跡　　SK：土坑
SP：柱穴

10. 本書で使用した図版の縮尺は注記の無い場合は次のとおりである。
遺構：1/40　　土器：1/4　　石器・金属製品：1/2

11. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

12. 今回の調査地である奥ノ坊地区は「奥ノ坊」「奥の坊」「奥之坊」等の表記の仕方がある。地区名(字名)については「奥ノ坊」と「奥の坊」がよく使われる。近世文書では「奥ノ坊」に加え「奥之坊」が使われているが，現在では地元の人は使わない。国土地理院の地形図には「奥之坊」が使用されている。本報告書では地区名を「奥ノ坊」と表記し，古墳についても「奥ノ坊」と表記をする。集落遺跡については古墳と区別するために「奥の坊」と表記する。

本文目次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　事業全体の経緯と経過……1
第２節　奥の坊遺跡における発掘調査の経緯と経過……2
第３節　整理作業の経過……3

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境……4
第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の経緯と経過

第１節　調査地の概要と基本層序……7
第２節　第2遺構面の遺構と遺物……7
第３節　第1遺構面の遺構と遺物……19

第４章　まとめ……40

観察表……45

写真図版……51

報告書抄録……63

挿図目次

第１図　高松市東部運動公園整備事業発掘調査地……2
第２図　周辺遺跡分布図(S=1/25,000)……6
第３図　奥の坊遺跡Ⅴ区北壁土層断面図……8
第４図　第2遺構面平面図……9
第５図　第1遺構面平面図……10
第６図　ST52001平・断面図及び出土遺物実測図……11
第７図　SH52001平・断面図……12
第８図　SH52001出土遺物実測図……13
第９図　第2遺構面検出土坑平・断面図①……15
第10図　第2遺構面検出土坑平・断面図②……16
第11図　SD52001・52002平・断面図……17
第12図　SD52003平・断面図及び出土遺物実測図……18
第13図　第1遺構面検出土坑平・断面図①……20
第14図　SK51009平・断面図及び出土遺物実測図……21
第15図　第1遺構面検出土坑平・断面図②……22
第16図　SK51014平・断面図及び出土遺物実測図……23
第17図　SK51016平・断面図及び出土遺物実測図……24
第18図　SK51018平・断面図……25
第19図　SK51018出土遺物実測図……26
第20図　SK51019平・断面図及び出土遺物実測図……27
第21図　第1遺構面検出土坑平・断面図③……27
第22図　SE51001平・断面図……28
第23図　SE51001出土遺物実測図①……29
第24図　SE51001出土遺物実測図②……30
第25図　SE51001出土遺物実測図③……31
第26図　SE51001出土遺物実測図④……32
第27図　SE51001出土遺物実測図⑤……33
第28図　SD51001平・断面図……34
第29図　SD51001(N)出土遺物実測図……34
第30図　SD51001(N)土層出土状況図……35
第31図　SD51001(S)出土遺物実測図①……36
第32図　SD51001(S)出土遺物実測図②……37
第33図　SD51001(S)出土遺物実測図③……38
第34図　ピット出土遺物実測図……39
第35図　弥生時代中期前半の遺構平面図……40
第36図　古代の遺構平面図……41
第37図　近世以降の遺構平面図……42

挿表目次

表１　東部運動公園整備事業に伴う発掘調査経過……1
表２　奥の坊遺跡Ⅴ区整理作業工程表……3
表３　土器観察表……47
表４　木器観察表……50
表５　石器観察表……50
表６　鉄器観察表……50

写真図版目次

写真1　奥の坊遺跡Ⅴ区空中写真……53
写真2　Ⅴ区北壁土層断面(西から)……54
写真3　Ⅴ区第2遺構面完掘状況(北から)……54
写真4　ST52001全景(北から)……54
写真5　ST52001検出状況(西から)……54
写真6　ST52001第2主体部検出状況(南から)……54
写真7　ST52001主体部検出状況(西から)……54
写真8　ST52001主体部検出状況(東から)……54
写真9　ST52001完掘状況(南西から)……54
写真10　ST52001完掘状況(西から)……55
写真11　ST52001第2主体部完掘状況(東から)……55
写真12　ST52001第2主体部石鏃検出状況(東から)……55
写真13　ST52001第2主体部土器出土検出状況(南から)……55
写真14　SH52001検出状況(南東から)……55
写真15　SH52001土層断面(南から)……55
写真16　SH52001完掘状況(南東から)……55
写真17　SD52001検出状況(東から)……55
写真18　第1遺構面完掘状況(北西から)……56
写真19　第1遺構面完掘状況(北東から)……56
写真20　第1遺構面完掘状況(北から)……56
写真21　SK51006遺物出土状況(東から)……56
写真22　SK51014遺物出土状況(東から)……56
写真23　SK51014遺物出土状況(北から)……56
写真24　SK51014完掘状況(東から)……56
写真25　SK51016完掘状況(北から)……56
写真26　SK51018遺物山上状況(南西から)……57
写真27　SK51009土層断面(北から)……57
写真28　SE51001完掘状況(東から)……57
写真29　SE51001完掘状況(西から)……57
写真30　SE51001木樋検出状況(西から)……57
写真31　SE51001桶検出状況(北から)……57
写真32　SD51001(S)完掘状況(東から)……57
写真33　SD51001(N)完掘状況(西から)……57
写真34　SD51001(S)作業風景(東から)……58
写真35　SD51001(N)完掘状況(東から)……58
写真36　SD51001(N)小壺・礫検出状況(南から)……58
写真37　SD51001(N)小壺検出状況(南から)……58
写真38　SD51001(N)小壺蓋取り上げ状況(南から)……58
写真39　調査風景(東から)……58
写真40　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物①……59
写真41　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物②……60
写真42　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物③……61

第1章　調査の経緯と経過

第1節 事業全体の経緯と経過

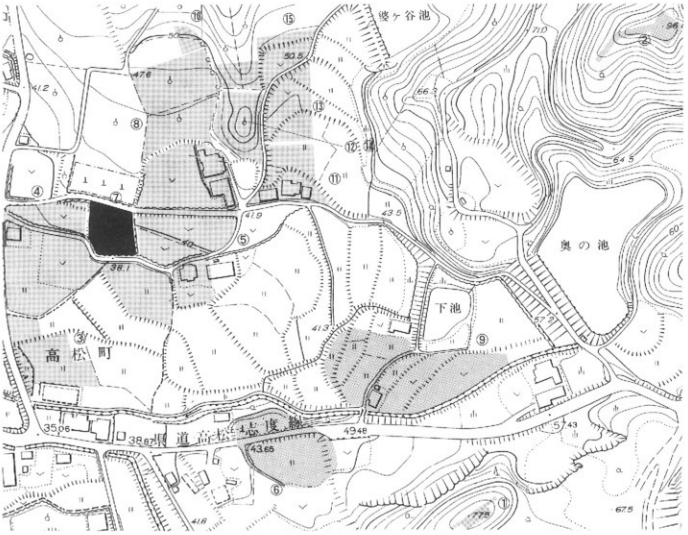
高松市では全市的なレベルで、まとまった総合的なスポーツレクリエーション活動拠点として高松市東部運動公園の整備が計画され、その基本構想・基本計画が平成5年度に策定された。運動公園整備予定地となったのは高松市の東端の丘陵地帯で、高松町の奥ノ坊・大空・金川渕地区にわたり、総事業面積は47.2haに及ぶ広大なものであった。整備予定地には香川県の弥生後期を代表する大空遺跡をはじめ、奥ノ坊古墳及びスベリ古墳の存在が知られており、この他にも未周知の埋蔵文化財が所在する可能性は高いと考えられた。このため、高松市教育委員会では工事に先立ち整備予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて都市開発部（現都市整備部）公園緑地課と協議を行い、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を明らかにすることで合意した。

そして、市教委では、平成7年度から用地買収の完了した土地について試掘調査を実施した。平成7年度には大空古墳、金川渕古墳、奥ノ坊2号墳（その後の本調査で3・4号墳を追加）を発見した。これを受け、再度公園緑地課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、工事の前に記録保存を行うことで合意した。試掘調査はその後も継続して行い、平成9年度までに整備予定地内に203箇所のトレンチを掘削した。この調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地であった大空遺跡、奥ノ坊古墳、スベリ古墳の3遺跡については、既にほとんど消滅しており事前の保護措置の必要がないことが判明した。一方、新たに奥の坊権現前遺跡、奥の坊遺跡、奥の坊奥池西遺跡、大空北遺跡の4集落遺跡が発見された。新たに発見された遺跡の総面積は約30,000㎡である。これらの遺跡についても順次公園緑地課と協議を行い、工事前に記録保存を行うことで合意した。

一方、運動公園整備工事は平成9年度から洪水調整池の工事を行い、平成12年度後半から全体の造成工事を行うことが予定されていた。このため洪水調整池部分の発掘調査を皮切りに順次調査を進め、平成12年度前半までに全調査を終えることとした。調査対象地は遺跡総面積30,000㎡のうち現道及び現水路を除く約26,910㎡とした。その後、工事計画が変更になり、平成14年度後半から全体造成工事が開始されることになり、発掘調査については平成14年度前半まで期間を延長できることとなった。このため、当初は掘削深度が深く調査面積も広大で調査期間も短いことから、掘削業務を委託発注して調査を実施していたが、平成11年度より比較的掘削深度の浅い部分については直営で調査を行った。また、平成15年1月には運動公園整備工事に使用する粘土を新田町久米池から採取することとなり、同地に所在する久米池遺跡についても工事に合わせて調査を実施した。

表1　東部運動公園整備事業に伴う発掘調査経過

番号	遺跡名	調査区	調査期間	調査面積（㎡）	調査方法	報告書
	試掘調査	全域	1995. 8. 4～1997. 10. 8	2,997	直営	Ⅰ（1999. 3刊）
①	大空古墳	全域	1996. 2. 14～1996. 2. 23	150	直営	
②	金川渕古墳	全域	1996. 2. 23～1996. 3. 8	300	直営	
③	奥の坊権現前遺跡	Ⅰ～Ⅲ	1997. 2. 10～1997. 3. 24	1,560	委託	Ⅱ（2004. 3刊）
④	奥の坊権現前遺跡	Ⅳ～Ⅵ	1997. 10. 7～1998. 3. 13	5,200	委託	
⑤	奥の坊遺跡	Ⅰ・Ⅱ	1998. 9. 14～1999. 2. 19	4,900	委託	Ⅴ（2006. 12刊）
		Ⅲ・Ⅳ				未刊
⑥	大空北遺跡	全域	1999. 4. 16～1999. 6. 4	2,200	直営	Ⅲ（2004. 12刊）
⑦	奥の坊遺跡	Ⅴ	1999. 5. 28～1999. 7. 13	700	直営	本書
⑧	奥の坊遺跡	Ⅵ・Ⅶ	1999. 11. 10～2000. 3. 3	2,300	委託	未刊
⑨	奥の坊奥池西遺跡	全域	2000. 4. 17～2000. 7. 25	3,600	直営	Ⅲ（2004. 12刊）
⑩	奥の坊遺跡	Ⅷ	2000. 10. 2～2000. 12. 28	300	直営	未刊
⑪	奥の坊遺跡	Ⅸ	2000. 10. 5～2001. 1. 12	1,180	委託	未刊
⑫	奥ノ坊古墳群（測量）	全域	2001. 6. 5～2001. 6. 27	－	直営	Ⅳ（2006. 3刊）
⑬	奥の坊遺跡	Ⅹ	2001. 8. 27～2002. 1. 18	1,320	委託	未刊
⑭	奥ノ坊古墳群	全域	2001. 9. 4～2001. 11. 28	1,020	直営	Ⅳ（2006. 3刊）
⑮	奥の坊遺跡	ⅩⅠ	2002. 4. 2～2002. 7. 5	1,180	直営	未刊
	久米池遺跡	全域	2003. 1. 8～2003. 1. 21	200	立会	Ⅳ（2006. 3刊）



第１図　高松市東部運動公園整備事業発掘調査地

第２節　奥の坊遺跡における発掘調査の経緯と経過

運動公園予定地内では，平成7年度から用地買収の進捗状況に応じて試掘調査を実施してきた。奥の坊遺跡は平成8年度の試掘調査によりその所在が明らかになったもので，遺跡は事業地の南緩斜面一体に広がりを見せ，その面積は約12,000㎡にのぼることが判明した。

遺跡の南西部が洪水調整池工事予定地内に含まれ，平成11年度工事着手予定であったことから，平成10年度末までの発掘調査が望まれた。また，運動公園全体の造成が平成12年度下半期に予定されていたことから，その他の部分についても早期の調査が望まれた。そこで，公園緑地課と協議を行った結果，遺跡の南西部を平成10年度，北東部を平成11年度で調査を実施することで合意した。しかしながら，平成9年度において，一部事業計画の変更があり，洪水調整池は平成12年度，造成は平成14年度下半期着手となることが決定したことから，平成10年度から5ヵ年をかけて発掘調査を実施することとなった。また，調査費用軽減のため一部直営方式により調査を実施した。10年度にⅠ～Ⅳ区，11年度にⅤ～Ⅶ区，12年度にⅧ・Ⅸ区，13年度にⅩ区，14年度にⅩⅠ区の調査を実施した。

本報告書で掲載したⅤ区の調査は，平成11年5月28日～7月13日に直営で実施した。大空北遺跡の調査と併行して実施した。調査面積は700㎡である。

第３節 整理作業の経過

東部運動公園整備に伴う発掘調査は平成14年度まで行われた。このため，各調査年度の翌年度に土器洗浄や接合等の基礎整理を行うのみで，本格的な整理作業は全調査終了後の平成14年度後半から実施した。

奥の坊遺跡Ⅴ区の整理作業は，平成12年度において基礎整理を実施し，本格的な整理作業は平成19年1月から11月において実施した。以下に工程表を掲載する。

表２　奥の坊遺跡Ⅴ区整理作業工程表

	平成12年度	平成18年度			平成19年度							
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
基礎整理												
実　測												
トレース												
レイアウト												
報告書作成												

第２章 地理的・歴史的環境

第１節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置し，瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は高松平野によって占められている。平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の独立山塊は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食開析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので，讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野は四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川によって形成された沖積地である。高松平野には，西から木津川，春東川，春日川，新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査区の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）は，この中の春日川，新川にほど近い地域である。春日・新川の両河川は水量に乏しく，平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また，古高松の北部は，江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり，寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると，その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり，屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による），東を立石山山塊，南を久米山丘陵，西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は，古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが，天正16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は，城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として香西成資が古老の話を元に享保4（1719）年に編纂した『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル，此所ハ屋島山，石清尾山両受ノ間，入海ニテ山田郡小山ノドマデ潮サシ来ル，遠干潟十春日里ト木太郷ノ間，海ノ中道アツテ通用ス。…」との記述がある。ここでいう小山とは，現在の高松市新田町小山にあたると考えられ，この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。

東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として発掘調査が行われた「奥ノ坊」は高松町の北東端にあたり，地形的には旧高松市と旧牟礼町（現高松市牟礼町）にまたがる標高100～200mの山塊の，西側低丘陵地の尾根及び谷部に位置する地域である。現在はかなり内陸的な様相を示すが，上記の推定海岸線から考えると海岸から1～1.5kmと非常に近かったと推測される。

第２節 歴史的環境

高松平野では，昭和60年代以降，高松東道路建設，太田第2土地区画整理事業，高松空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い発掘調査件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大し，高松平野の形成過程や集落の様相が次第に明らかになってきている。今回の発掘調査事業地は高松平野の東部にあたり，平野北西部に位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地帯として早くから認識されてきた地域である。

当事業地周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが，旧石器・縄文時代の遺物・遺構も若干知られている。旧石器時代については，本格的な遺構は知られていないが，久米池南遺跡（東山崎町）においてナイフ型石器が出土している。縄文時代については，小山・南谷遺跡において落とし穴状の土坑が14基検出されているほか，旧河道中から縄文土器が出土している。当事業地においても奥の坊奥池西遺跡において落とし穴と考えられる遺構が検出され，縄文土器が出土しており，小山・南谷遺跡との関連が注目される。一方，平野中央部の発掘調査においては旧河道からの乾潮の土器の出土例は多いが，井手東Ⅰ遺跡において地表面下約70cmからアカホヤの堆積層が確認されていることが特筆される。

弥生時代前期の遺跡としては，平野中央部では二重の環濠が検出された汐入遺跡等が知られているが，平野東部では現在のところ発見されていない。中期前半では当事業地で確認された奥の坊遺跡が知られている。南向きの緩斜面に営まれた集落で，多量の土器・石器に伴い分銅形土製品や擬朝鮮系無文土器等も出土している。また，丘陵部を東に越えた羽間遺跡では細形銅剣が出土している。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では既に消滅してしまったが，香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土したことで知られる大空遺跡が当事業地内に所在した。また，当事業地内の奥の坊権現前遺跡をはじめ，スベリ山南遺跡，南谷遺跡，小山・南谷遺跡がある。いずれの遺跡においても製塩土器が多量に出土することが知られている。後期後半では漆を採取していたと考えられる原中村遺跡があげられる。

古墳時代の集落遺跡は周辺では見られず，平野中央部においてもあまり知られていない。一方，古墳は多く築造されている。高松平野では積石塚として有名な石清尾山古墳群があるが，平野東部では盛土古墳しか見られない。平野東部では諏訪神社古墳が古式の古墳であることが知られている。また，前期の高松市茶臼山古墳は全長60mの前方後円墳で，後円部には竪穴式石室が2箇所設けられており，第1主体からは鍬形石2点，画文帯神獣鏡1点などが出土している。中期では屋島の北端に所在する長崎鼻古墳において，阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が出土している。後期では副室構造の小山古墳，天井石が巨大な1石の石材で構築された山下古墳，T字型の石室を持つ讃岐本神社古墳等特異な古墳が多い。中でも香川県で唯一石棚を持ち，畿内型の亀甲型陶棺を埋葬主体とし，承盤付銅椀を副葬する久本古墳の存在は特筆できる。この他，小規模な長尾古墳群，岡山古墳群，岡山小古墳群，漆谷古墳群，平尾古墳群といった群集墳も見られる。当事業地においても，奥ノ坊古墳群，大空古墳，金川渕古墳の調査が実施されているが，いずれも損壊が著しく，詳細は不明である。

古代の遺跡では，『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また新田本村遺跡と小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し，方向の異なる条里地割が発見されている。この先行条里地割が当事業地内の奥の坊権現前遺跡及び奥の坊遺跡においても確認されている。古代寺院としては山下廃寺がある。古式の瓦を出土していることが知られているが，発掘調査は行われていないので詳細は不明である。また屋島北嶺の千間堂において10～11世紀と考えられる礎石建物及び集石遺構が検出されており，屋島寺の前身遺構と考えられている。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く，数多くの戦いが行われている。まず，源氏と平氏が屋島で戦い，那須与一や佐藤継信の戦いぶりが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが，北朝方の細川定禅の攻撃により落城した。その後喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中世の遺構としては，中世末～近世初頭にかけての溝で区画された屋敷が検出された川南・西遺跡があげられる。当事業地内では中世の遺物は出土するものの，遺構としては奥の坊奥池西遺跡において溝が検出された程度である。

近世の遺跡としては，近年高松城周辺で数多くの調査が実施されており，武家屋敷等が検出されている。平野東部では，東山崎・水出遺跡や川南・東遺跡等の農村が見られる。当事業地内では奥の坊遺跡において一部近世の屋敷地を検出しているにすぎない。

第２図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

1 奥の坊権現前遺跡	**2 奥の坊遺跡**	3 大空北遺跡	4 奥の坊奥池西遺跡	5 奥ノ坊1号墳(消滅)
6 奥ノ坊2～4号墳	7 金川渕古墳	8 大空古墳	9 スベリ古墳(消滅)	10 大空遺跡(消滅)
11 大空南遺跡	12 屋嶋城跡	12 喜岡城(高松城)跡	14 羽間遺跡	15 長尾1号墳
16 長尾2号墳	17 長尾3号墳	18 南谷遺跡	19 小山・南谷遺跡	20 新田本村遺跡
21 小山古墳	22 山下古墳	22 山下廃寺	24 久本古墳	24 岡山小古墳群
26 岡山古墳群	26 漆谷古墳群	28 久米池遺跡		

第３章　調査の経緯と経過

第１節 調査地の概要と基本層序（第3～5図）

奥の坊遺跡は東から西に伸びる丘陵の南向きの緩斜面に立地しているが，さらに細かく見ると，丘陵から南へ派生する小さな2つの尾根に東西を挟まれた谷状部分が集落域である。Ⅴ区は奥の坊遺跡の南西端に位置し，集落域を画する西側尾根の先端部分に位置する。調査前は北半が畑で，南半が宅地で，約1mの段差が所在し，現地表面の標高は38．5～39．5mである。

調査に際しては，調査区の北壁において上層観察を行った。現地表面以下20cmは耕作土層（第3図1層）である。その下層には旧耕作土（第3図8層）及び旧床土（第3図9層）が見られるが，西側ではほぼ同じ標高において黄橙色粗砂層（第3図6層）及び褐灰色粘質シルト層（第3図7層）が約10cmの厚さで堆積しており，造成土と考えられる。西端では，旧床土層の下層において，灰黄色細砂（第3図10層）の堆積が約10cm見られる。これらの下層において，地山と考えられるにぶい黄橙色粘質シルト層（第3図13層）が見られる。また，北壁では検出されていないが，調査区の南西部では，遺物を多く包含する第10層と13層の間に褐灰色砂混粘質土層が所在した。

遺構面は，遺物包含層上面と地山上面の2面で検出した。遺物包含層上面で検出した遺構面を第1遺構面，地山直上で検出した遺構面を第2遺構面として調査を行った。なお，遺物包含層の所在する南西部以外は，第1遺構面の遺構も地山直上において検出しているが，本報告書では調査区南西部の遺構埋土状況及び出土遺物から，第1遺構面と第2遺構面に分類し，報告する。

第1遺構面では十坑24基，水溜め遺構1基，溝5条，ピット等を検出し，その出土遺物から概ね近世以降の遺構面と考えられる。第2遺構面では，西半に遺構が集中するが，方形周溝状遺構1基，竪穴住居跡1棟，土坑13基，溝3条，ピット等を検出し，その出土遺物から概ね弥生時代中期前半の遺構面と考えられたが，一部古代の遺構も存在する。

第２節 第2遺構面の遺構と遺物

ST52001（第6図）

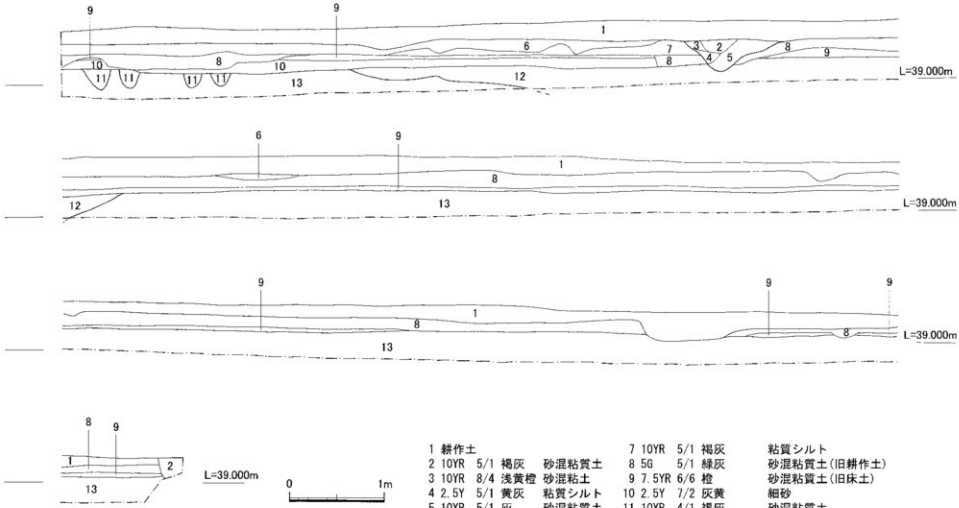
調査区南西部で検出した方形周溝状遺構である。方形に巡る周溝は幅30～50cmを測り，深さは最深部で10cmを測る。断面形状は浅いU字を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。全体に削平が著しく，浅い埋土であることから，開口部とは断定できないが，溝は東側で途切れており，主軸方位はN－78°－Eである。周溝内部の規模は東西4．3m，南北4．8mを測り，周溝を含めた規模は，東西5．2m，南北5．8mを測る。周溝内部では3基の土坑を検出した。周溝と土坑がほぼ同じ主軸方位であることから，方形周溝墓を想定して第1～第3主体部とした。

第1主体部は周溝状遺構のほぼ中央に位置する。近世の溝SD51001（N）に切られており，南西隅部分しか残存していないが，平面形態は長方形を呈すると考えられ，長辺1．42m以上，短辺42cm以上，深さ5cmを測り，主軸方位はN－77°－Eである。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。床面はほぼ水平である。

第2主体部は第1主体部の南側において並行して検出した。平面形態は長方形を呈し，長辺2．10m，短辺70cm，深さ6cmを測り，主軸方位はN－75°－Eである。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。床面は平坦面であるが，わずかに東側が高い。

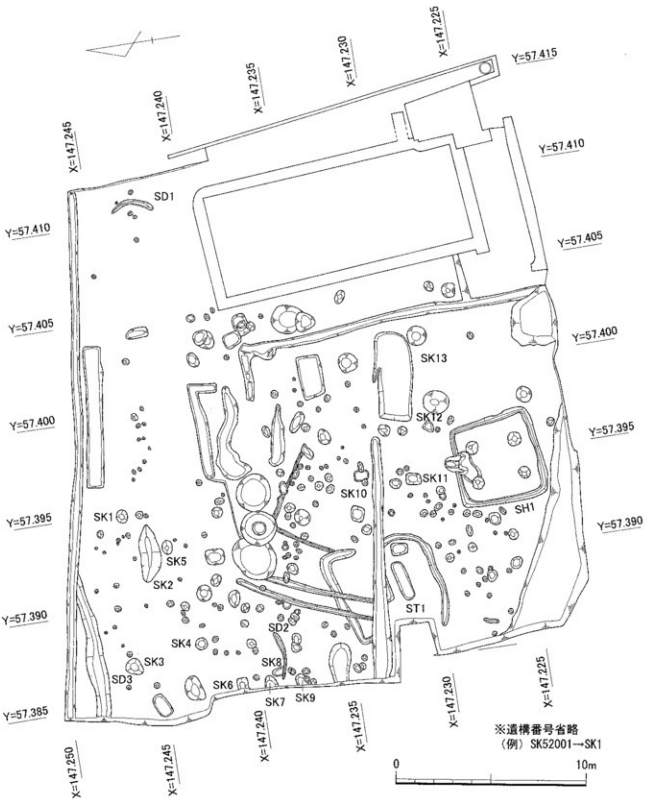
第3主体部は周溝状遺構の南東隅に位置する。平面形態は台形を呈し，南北87cm，東西は北辺66cm，南辺50cm，深さ5cmを測り，主軸方位はN－2°－Eである。断面形状は浅い逆台形を呈し，埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。床面は平坦面であるが，わずかに北側が高い。

出土遺物は第2主体部で検出した2点のみである。1は弥生土器の底部である。外面タテヘラミガキ，内面ナデである。S1は凹基式の石鏃である。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。

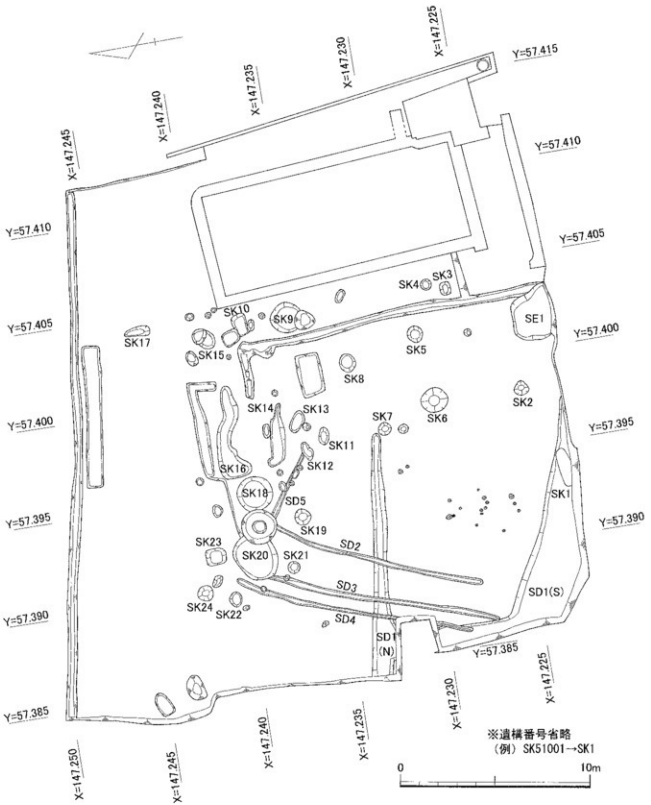


1 耕作土
2 10YR 5/1 褐灰 砂混粘質土
3 10YR 8/4 浅黄橙 砂混粘土
4 2.5Y 5/1 黄灰 粘質シルト
5 10YR 5/1 灰 砂混粘質土
6 10YR 8/6 黄橙 粗砂
7 10YR 5/1 褐灰 粘質シルト
8 5G 5/1 緑灰 砂混粘質土(旧耕作土)
9 7.5YR 6/6 橙 砂混粘質土(旧床土)
10 2.5Y 7/2 灰黄 細砂
11 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土
12 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土
13 10YR 7/3 にぶい黄橙 粘質シルト

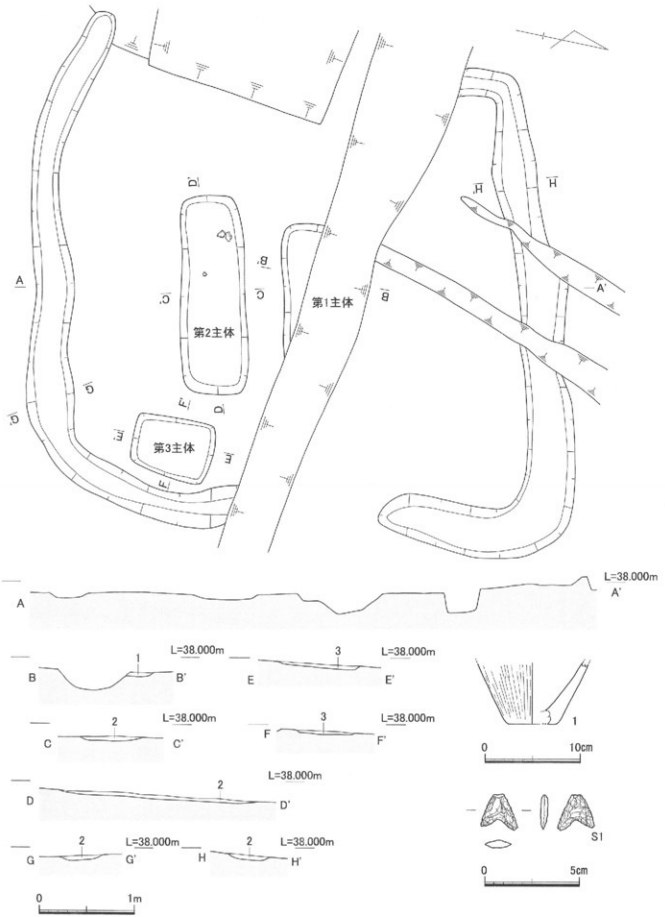
第３図　奥の坊遺跡Ｖ区北壁土層断面図



第４図　第２遺構面平面図

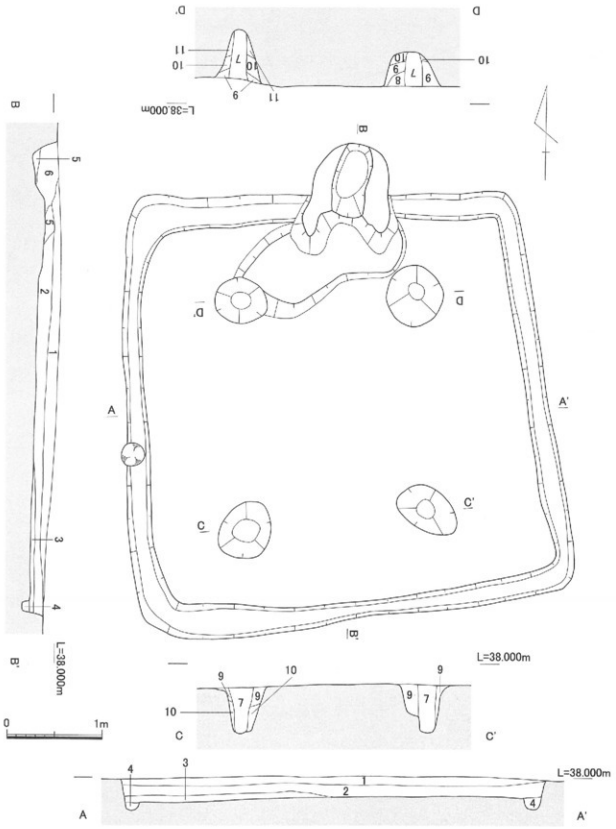


第５図　第１遺構面平面図



1 10YR 4/1 褐灰　砂混粘質土　3 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土
2 10YR 4/2 灰黄褐 砂混粘質土

第６図　ST52001平・断面図及び出土遺物実測図



1 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土　5 5YR 7/4 にぶい橙 粘土(焼土塊含む，壁くずれ落ち)　9 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土
2 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土　6 7.5YR 3/1 黒褐 砂混粘質土(炭多く含む)　10 10YR 5/2 灰黄褐 砂混粘質土
3 10YR 3/2 黒褐 砂混粘質土　7 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土　11 10YR 2/1 黒 砂混粘質土
4 10YR 3/2 黒褐 砂混粘質土　8 10YR 4/2 灰黄褐 砂混粘質土

第７図　SH52001平・断面図

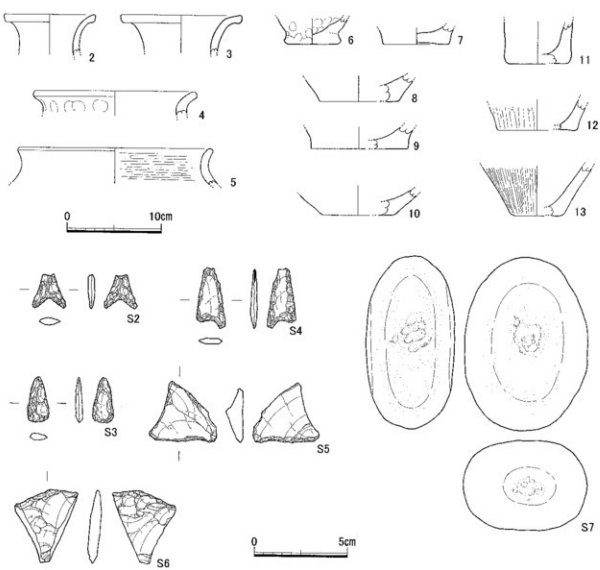
SH52001（第7・8図）

調査区南西部で検出した竪穴住居跡である。平面形態は正方形を呈し，東西4.65m，南北4.68m，深さ26cmを測り，主軸方位はN－5°－Wである。断面形態は逆台形を呈し，埋土は3層に分層できる。第1層は黒褐色砂混粘質土，第2層は褐灰色砂混粘質土，第3層は黒褐色砂混粘質土である。

住居の北壁中央部において竈を検出した。にぶい橙色の粘土で構築された袖部が残存するが，天上部は崩落している。燃焼部は幅65cmで，床面は掘りくぼめられていない。煙道部は幅35cm，長さ78cmであり，住居北側に大きく突き出しており，その掘り込みも急である。燃焼部，煙道部ともに被熱痕が顕著に見られ，埋上は炭を多く含む黒褐色砂混粘質土の単層で，最下層に天井部の崩落部分が残存する。燃焼部を含む竈の周囲の床面は楕円形状に1段高くなっている。その規模は長径約1.80m，短径約85cm，深さ約5cmで，緩やかな段差で，地山を削り出している。

竈部分以外の壁には幅18～36cm，深さ12cmの壁溝が巡る。壁溝の断面形態はU字を呈し，埋土は黒褐色砂混粘質土である。

主柱穴は4基で，いずれも楕円形を呈し，長径55～65cm，短径45～55cm，深さ37～55cmを測る。柱穴の埋土は，柱痕が黒褐色砂混粘質土で，掘り方は灰黄褐色及び褐灰色砂混粘質土であるが，北西の柱穴のみ最下層で黒色砂混粘質土が認められた。柱間は北辺1.85m，西辺2.40m，南辺1.95m，東辺2.30mである。



第８図　SH52001出土遺物実測図

出土遺物は第8図に掲載した。2・3は口縁部がラッパ状に開く弥生土器の広口壺である。4は短く外反する口縁部を持つ弥生土器の広口壺で，外面指頭圧である。5は弥生土器の短頸壺で，外面ナデ，内面ヨコヘラミガキである。6～13は弥生土器の底部である。6は内外面に指頭圧を多く残す。7～11は摩滅が著しいが，内外面ともナデである。12・13は外面タテヘラミガキ，内面ナデである。S2～S4は右鍬である。S2は凹基式で，抉りは深い。S3は平基式の完形品である。S4は凹基式である。S・S6は削器である。S5は全体に白色風化が目立つ。S7は叩石であり，3面に敲打痕が見られる。

弥生時代中期前半の遺物しか出土していないが，竈を持つ竪穴住居であることから，時期が下ると考えられる。なお，西側に隣接する奥の坊権現前遺跡において7世紀後半の竪穴住居SH53003を検出しており，周辺の調査では7～8世紀の遺構の検出例があることから，同時期の遺構の可能性が高い。

SK52001（第9図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径63cm，短径61cm，深さ11cmを測る。断面形態は皿状を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK52002（第9図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し，長辺3.03m，短辺1.04m，深さ63cmを測る。断面形態は2段落ちになっており，埋土は4層に分層できる。第1層はにぶい黄橙色砂混粘質土，第2層は暗灰黄色細砂，第3層は褐色粗砂，第4層は黒褐色砂混粘土層で，第3層までは比較的緩やかに落ち込むのに対し，第4層はほぼ垂直に20cm落ち込み，遺構底面は平坦である。弥生土器の小片が出土しており，弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52003（第9図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径86cm，短径85cm，深さ21cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。弥生土器の小片が出土しており，弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52004（第9図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径62cm，短径59cm，深さ10cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52005（第9図）

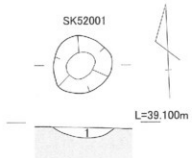
調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径71cm，短径55cm，深さ20cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52006（第9図）

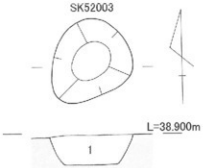
調査区北西部で検出した土坑である。西半が調査区外に延びるため不明であるが，平面形態は長方形を呈すると考えられ，長辺63cm以上，短辺55cm，深さ39cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52007（第9図）

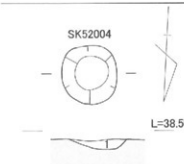
調査区北西部で検出した土坑である。西半が調査区外に延びるため不明であるが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径71cm以上，短径59cm，深さ13cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。



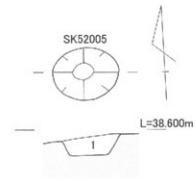
1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土



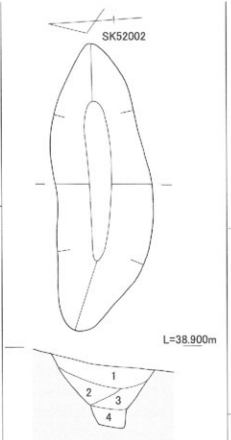
1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土



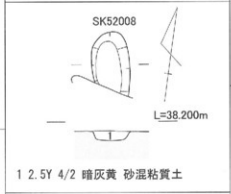
1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土



1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

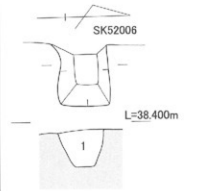


1 10YR 6/3 にぶい黄橙 砂混粘質土
2 2.5Y 5/2 暗灰黄 細砂
3 10YR 4/4 褐 粗砂
4 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土



1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土



1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

1 2.5 Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土

第９図　第２遺構面検出土坑平・断面図①

SK52008（第9図）

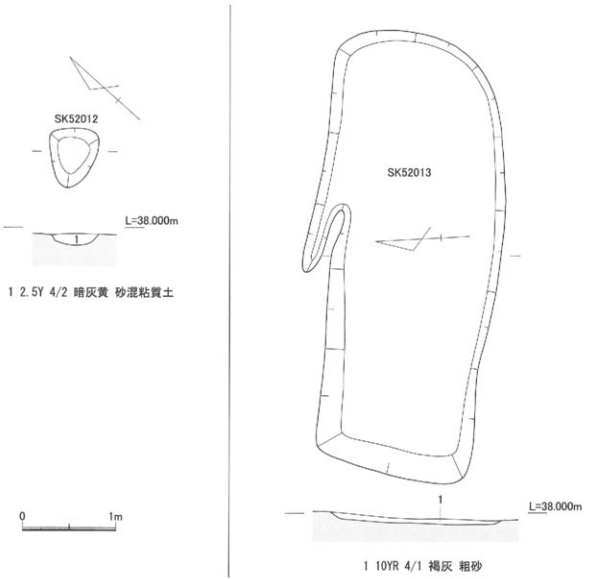
調査区北西部で検出した土坑である。SD52002に切られているが，平面形態は楕円形を呈し，長径61cm以上，短径41cm，深さ11cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52009（第9図）

調査区北西部で検出した土坑である。西半が調査区外に延びるため不明であるが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径72cm以上，短径56cm，深さ18cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52010（第9図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し，長辺75cm，短辺55cm，深さ5cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。



第10図　第２遺構面検出土坑平・断面図②

SK52011（第9図）

調査区中央南部で検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し，長辺79cm，短辺58cm，深さ11cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52012（第10図）

調査区中央南部で検出した土坑である。平面形態は楕円を呈し，長径62cm，短径51cm，深さ12cmを測る。断面形態は浅いU字を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SK52013（第10図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し，長辺4.73m，短辺2.12m，深さ5cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し，埋土は褐灰色粗砂の単層である。弥生土器の小片が出土しており，弥生時代中期前半の遺構と考えられる。

SD52001（第11図）

調査区北東部で検出した溝である。幅28cm，長さ2.23m，深さ22cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。弧状の形態であることから，竪穴住居跡の残存部の可能性が考えられる。

SD52002（第11図）

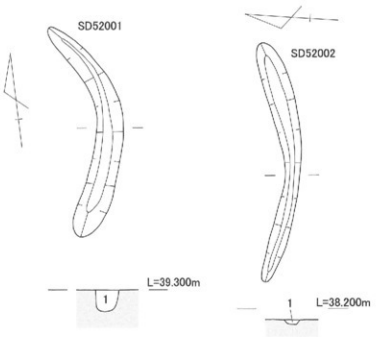
調査区北西部で検出した溝である。幅28cm，長さ2.52m，深さ5cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の弥生時代中期前半の遺構と同じことから弥生時代中期前半の遺構と考えられる。弧状の形態であることから，竪穴住居の残存部の可能性が考えられる。

SD52003（第12図）

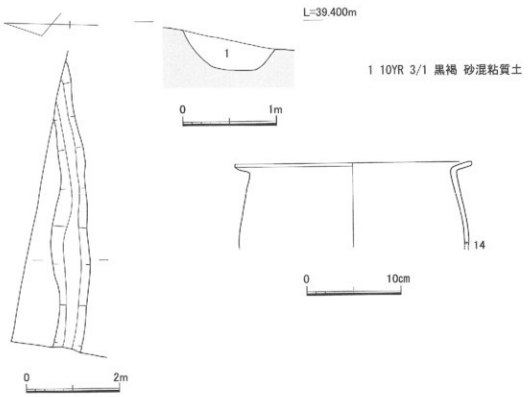
調査区北西隅で検出した溝である。ほぼ東西方向を指向する。幅82cm，長さ6.18m以上，深さ40cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は黒褐色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は14の弥生土器甕1点のみである。

東側に隣接する奥の坊権現前遺跡検出の7世紀後半の溝SD53001の延伸と見られることから，同時期の遺構と考えられる。



第11図　SD52001・52002平・断面図



第12図　SD52003平・断面図及び出土遺物実測図

第３節 第１遺構面の遺構と遺物

SK51001（第5図）

調査区南部中央で検出した土坑である。南半は調査区外に延びるが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径2.05m，短径75cm以上を測る。遺物は出土していないが，SD51001を切っており，埋土は旧耕作土と同じ緑灰色砂混粘質土であり，近世以降の遺構と考えられる。

SK51002（第13図）

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径82cm，短径74cm，深さ28cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51003（第13図）

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し，長辺69cm，短辺53cm，深さ42cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51004（第13図）

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径58cm，短径54cm，深さ55cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51005（第13図）

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径88cm，短径80cm，深さ31cmを測る。断面形態は半円形を呈し，埋土は3層に分層できる。第1層は暗灰黄色砂混粘質土，第2層は炭を含む黄灰色粗砂，第3層は浅黄色粘土ブロックを含む黄灰色砂混粘質土である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51006（第13図）

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径1.36m，短径1.24m，深さ64cmを測る。断面形態は逆台形の2段落ちであり，埋土は2層に分層できる。第1層は浅黄色粘土ブロックを含む灰黄褐色細砂～粗砂で，第2層は灰黄色粗砂である。第2層が掘り方で，第1層部分には寛などを埋設していたことが予想される。なお，第1層内部には大型の石材や土師質土器片が投棄されており，人為的に埋められたと考えられる。出土した土師質土器片から近世の遺構と考えられる。

SK51007（第13図）

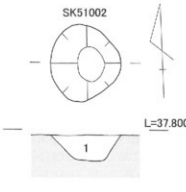
調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径66cm，深さ30cmを測る。断面形態は半円形を呈し，埋土は2層に分層できる。第1層は褐灰色砂混粘質土，第2層は灰黄褐色シルト質極細砂である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51008（第13図）

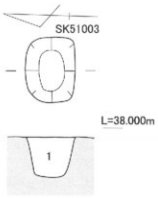
調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径97cm，短径85cm，深さ40cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は3層に分層できる。第1層は暗灰黄色粗砂，第2層は黒褐色砂混粘質土，第3層は灰黄色細砂である。陶磁器小片が出土しており，近世の遺構と考えられる。

SK51009（第14図）

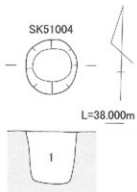
調査区北東部で検出した土坑である。攪乱により一部削平を受けているが，平面形態は円形を呈すると考えられ，長径1.53m，短径1.40m，深さ31cmを測る。断面形態は皿状を呈し，埋土は4層に分層できる。第1層は灰黄褐色砂混粘質土，第2層はにぶい黄褐色砂混粘質土，第3層は黒褐色細砂，第4層はにぶい黄橙色細



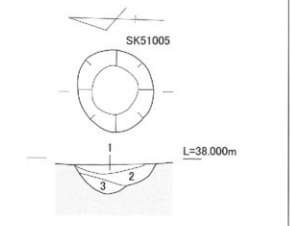
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



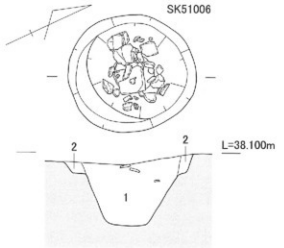
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



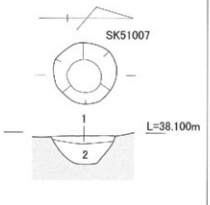
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



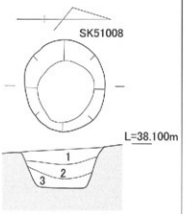
1 2.5Y 5/2 暗灰黄 砂混粘質土
2 2.5Y 4/1 黄灰 粗砂(炭含む)
3 2.5Y 5/1 黄灰 砂混粘質土
(浅黄色粘土ブロック含む)



1 10YR 5/2 灰黄褐 細砂～粗砂(浅黄色粘土ブロック・土器片含む)
2 2.5Y 6/2 灰黄 粗砂



1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘土
2 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質極細砂



1 2.5Y 5/2 暗灰黄 粗砂
2 10YR 3/1 黒褐 砂混粘質土
3 2.5Y 6/2 灰黄 粗砂

1 10YR 3/3 暗褐 砂混粘質土

第13図 第１遺構面検出土坑平・断面図①

砂であり，上層の粘質土層と下層の砂層に大別できる。

遺物は上層から多く出土した。15は肥前系磁器の碗である。16は瀬戸美濃系磁器の碗である。内面に砂目痕が残る。17は産地不明陶器の鉢である。18は瀬戸美濃系の陶胎染付碗である。19は備前焼陶器の擂鉢である。K1は鉄製農具の鋤先である。出土遺物から18世紀後半から19世紀前半の遺構と考えられる。

SK51010（第13図）

調査区北東部で検出した土坑である。ピットに切られているが，平面形態は長方形を呈し，長辺1.16m，短辺74cm，深さ22cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は暗褐色砂混粘土の単層である。陶磁器小片が出土していることから，近世の遺構と考えられる。

SK51011（第15図）

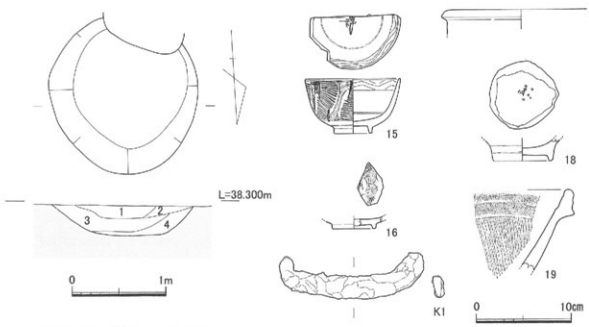
調査区中央で検出した土坑である。平面形態は不整形な楕円形を呈し，長径88cm，短径56cm，深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈し，埋土は2層に分層できる。第1層は黒褐色砂混粘質土，第2層は灰黄褐色シルト質極細砂である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51012（第15図）

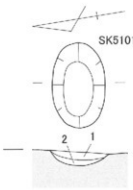
調査区中央で検出した土坑である。平面形態は不整形な楕円形を呈し，長径1.04m，短径47cm，深さ11cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，明治期以降の遺構と考えられるSD51005を切っていることから，明治期以降の遺構と考えられる。

SK51013（第15図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.21m，短径64cm，深さ10cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土はにぶい黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

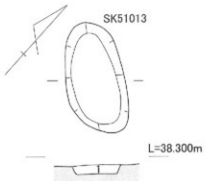


第14図　SK51009平・断面図及び出土遺物実測図

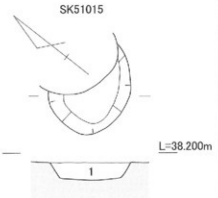


1 2.5Y 3/1 黒褐　砂混粘質土
2 10YR 6/2 灰黄褐 シルト質極細砂

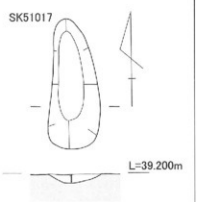
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



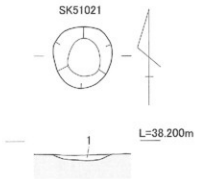
1 10YR 4/3 にぶい黄褐 砂混粘質土



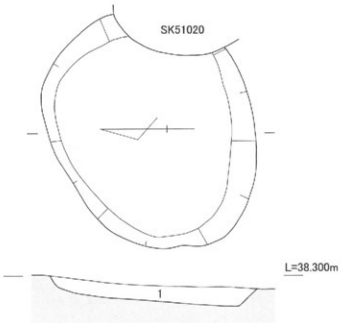
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



1 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂混粘質土



1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土



1 10YR 4/2 灰黄褐 砂混粘質土

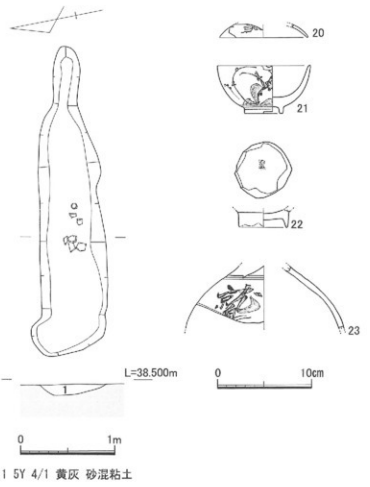
1 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土

第15図　第１遺構面検出土坑平・断面図②

SK51014（第16図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し，長辺3.23m，短辺70cm，深さ11cmを測る。断面形態は皿状を呈し，埋土は黄灰色砂混粘土の単層である。

遺物は遺構中央において密集して出土した。20は肥前系磁器の蓋である。外面に草花文が施されている。21は肥前系磁器の小丸碗である。外面に草花文と圏線3条が施されている。22は肥前系磁器の広東碗である。外面に圏線1条，見込みに「寿」の文字が見られる。23は肥前系磁器の猪口である。外面に「鷺」の字が見られ，内面無釉である。出土遺物から18世紀～19世紀前半の遺構と考えられる。



第16図　SK51014平・断面図及び出土遺物実測図

SK51015（第15図）

調査区北東部で検出した土坑である。北半が攪乱を受けているが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径87cm以上，短径50cm，深さ19cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51016（第17図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は溝状を呈し，長辺4.95m，短辺69cm，深さ14cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は灰色砂混粘土の単層である。

出土遺物のうち図示できたものは2点である。24は産地不明陶器の甕である。内外面とも無釉である。25は土師質土器の焙烙である。出土遺物から19世紀の遺構と考えられる。

SK51017（第15図）

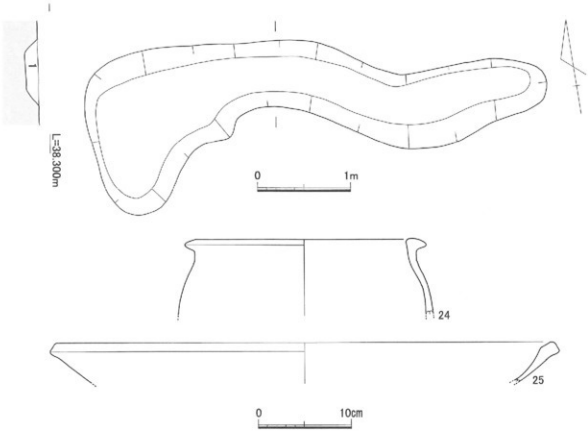
調査区北東部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径1.38m，短径54cm，深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し，埋土は暗灰黄色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51018（第18・19図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径1.86m，短径1.73m，深さ1.13mを測る。断面形態は方形を呈するが，上面部分でやや2段落ちとなっている。埋土は2層に分層でき，上層は瓦・土器・石を多く含む黒色砂混粘土，下層は灰白色細砂～粗砂である。

出土遺物は第19図に掲載した。S8は砂岩製の砥石である。W1は板材である。26は肥前系磁器の端反碗である。外面に草花文，内面に圏線が施されている。27は瀬戸美濃系磁器の碗である。内外面とも草花文が施されている。28は土師質土器の火鉢である。29は土師質土器の焙烙である。30は土師質土器の甕である。口縁部内面は接合面で剥離しており，外面ナデ，内面粗いヨコハケである。31は土師質土器の甕である。外面粗いタテハケ後ヨコハケ，内面ナデである。32は土師質土器の甕である。内外面ともナデで，外面に斜格

1 7.5Y 4/1 灰 砂混粘土(陶磁器片含む)



第17図　SK51016平・断面図及び出土遺物実測図

子文が施されている。出土遺物から19世紀の遺構と考えられる。

SK51019（第20図）

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，長径86cm，短径82cm，深さ14cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は2層に分層できる。上層は土器片を含む黒色粘土，下層は灰黄褐色細砂である。

出土遺物のうち図示できたものは33の土師質土器の火鉢のみである。外面板ナデ，内面ナデである。出土遺物から19世紀の遺構と考えられる。

SK51020（第15図）

調査区北西部で検出した土坑である。東端が撹乱を受けているが，平面形態は楕円形を呈すると考えられ，長径2.22m，短径2.06m，深さ16cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は灰黄褐色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，明治期以降と考えられるSD51003を切っていることから明治期以降の遺構と考えられる。

SK51021（第15図）

調査区西部中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し，直径65cm，深さ6cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51022（第15図）

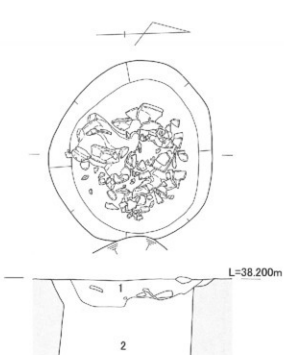
調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径78cm，短径66cm，深さ10cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51023（第21図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し，長辺1.07m，短辺85cm，深さ18cmを測る。断面形態は逆台形を呈し，埋土はオリーブ黒色粘土である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。

SK51024（第21図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長径82cm，短径78cm，深さ21cmを測る。断面形態は半円形を呈し，埋土は柱穴状に中央部分と周囲の2層に分層できる。中央部分は浅黄橙色粘土，外周部分は黒褐色砂混粘土である。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，埋土が周辺の近世以降の遺構と同じことから同時期の遺構と考えられる。



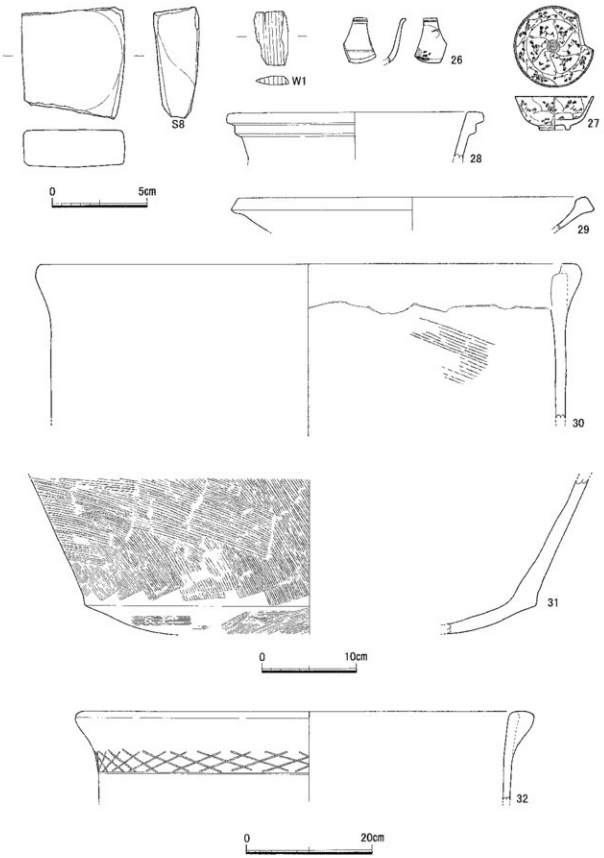
1 2.5Y 2/1 黒　砂混粘土（瓦・土器・石多く含む）
2 10Y 7/1 灰白 細砂～粗砂

第18図　SK51018平・断面図

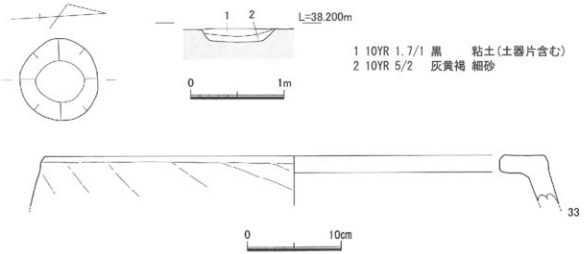
SE51001（第22～27図）

調査区南西端で検出した遺構である。南半が調査区外に延びるため平面形態は不明であるが，検出部分は長辺2.75m，短辺2.10m以上，深さ92cmを測る。断面形態は方形を呈し，埋土は第22図第3～8層の6層に分層できる。第1層（第22図第3層）は灰黄褐色砂混粘質土，第2層（第22図第4層）は灰白色細砂，第3層（第22図第5層）は灰黄褐色砂混粘土，第4層（第22図第6層）は暗青灰色砂混粘土，第5層（第22図第7層）は緑灰色砂混粘土，第6層（第22図第8層）は青灰色砂混粘土である。検出部分の中央には直径40cm，高さ40cmの桶が設置されている。桶の西側35cmの位置には杭列が認められ，東側にも1本だけではあるが杭が認められる。このため，桶から東西35cm離れた位置に杭列が所在したことが推定される。また，桶に向かって水が流れ込むように南西方向から木樋が延びている。調査区の南側には現在も用水路が隣接しており，後述するSD51001(S)がほぼ同様の性格を持った遺構と考えられることから，SD51001(S)の延伸部分から水を引き込んだ遺構と考えられる。なお，木樋の東側には長辺42cm，短辺28cmの安山岩が所在した。平坦面を上面に向けていることから，第4層（第22図第6層）まで埋没した段階で意図的に設置したものと考えられる。

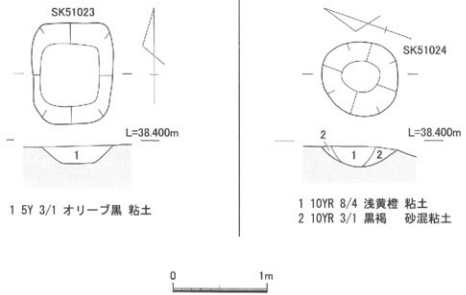
出土遺物は第23～27図に掲載した。34は肥前系磁器の紅皿である。口縁端部を拡張させている。35・36は肥前系磁器の碗である。内外面とも一重網目と圏線が施されている。37は肥前系磁器の碗である。外面草花文，内面区画文が施されている。38は肥前系陶器の碗である。内外面とも施釉である。39は肥前系磁器の碗である。外面に区画文と圏線が施され，見込みに圏線と斜格子文が施されている。また，見込みには，輪状の重ね焼き痕跡が残る。40は肥前系磁器の皿である。型成形で，内面は型紙摺である。41は京・信楽系陶器の碗である。高台無釉である。42は京・信楽系陶器の皿である。内外面とも施釉である。43は屋島焼陶器の土瓶である。外面無釉，内面施釉である。44は備前焼陶器瓶である。底面に窯記号と見られる刻印が施されている。45・46は明石焼陶器の擂鉢である。47・48は瓦質土器の火鉢である。48は外面型成形による草花文



第19図　SK51018出土遺物実測図



第20図　SK51019平・断面図及び出土遺物実測図



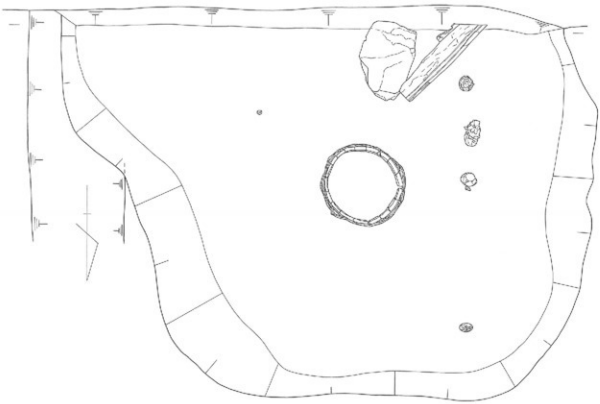
第21図　第１遺構面検出土坑平・断面図③

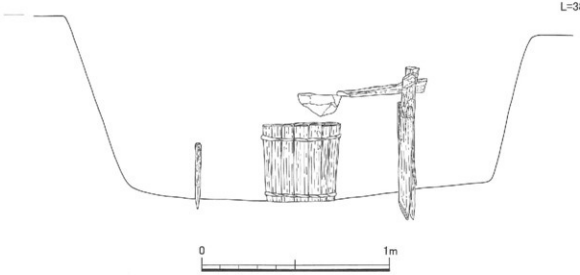
が施されている。49は土師質土器の甕である。外面板ナデ，内面指頭ナデである。50は土師質土器の甕である。K2は肘壺金具である。K3は庖丁である。S9・S10は凝灰岩製の砥である。S11は砂岩製の砥石である。側面にも使用痕が認められる。W2～W20は杭材である。W21は板材である。2箇所に円孔が見られる。W22～W26は杭である。いずれも樹皮付きの丸太材で，W22・W23は比較的細いもので，先端を1方向から斜めに切り落としたものである。W24～W26は比較的に太いもので，先端部を五角形ないし六角形に削っている。W27は木樋である。底板の両端に幅1.5cm，深さ3～5mm程度の溝を彫り，側板を立てる組み合わせ式である。出土遺物から18世紀～19世紀後半の遺構と考えられる。

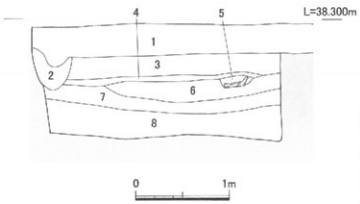
SD51001（第28～33図）

調査区南西部で検出した溝である。東西方向の2本の溝とそれをつなぐ南北方向の溝からなる。北側をSD51001(N)，南側をSD51001(S)として調査を実施した。また，北側の溝と南側の溝をつなぐ南北方向の溝については，東方部分のみしか確認しておらず，詳細は不明である。

SD51001(N)は幅1.10m，検出長12.80m，深さ47cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土は4層に分層

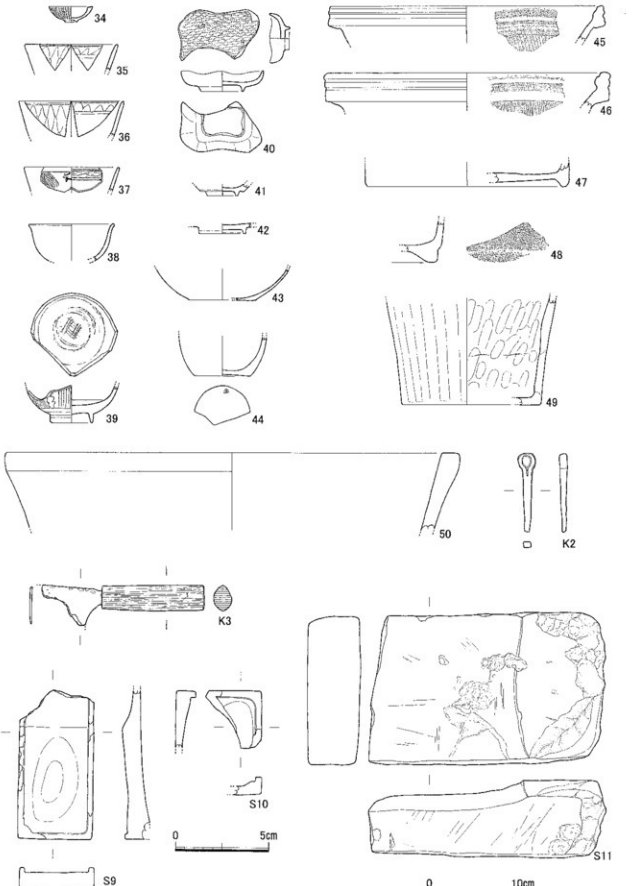




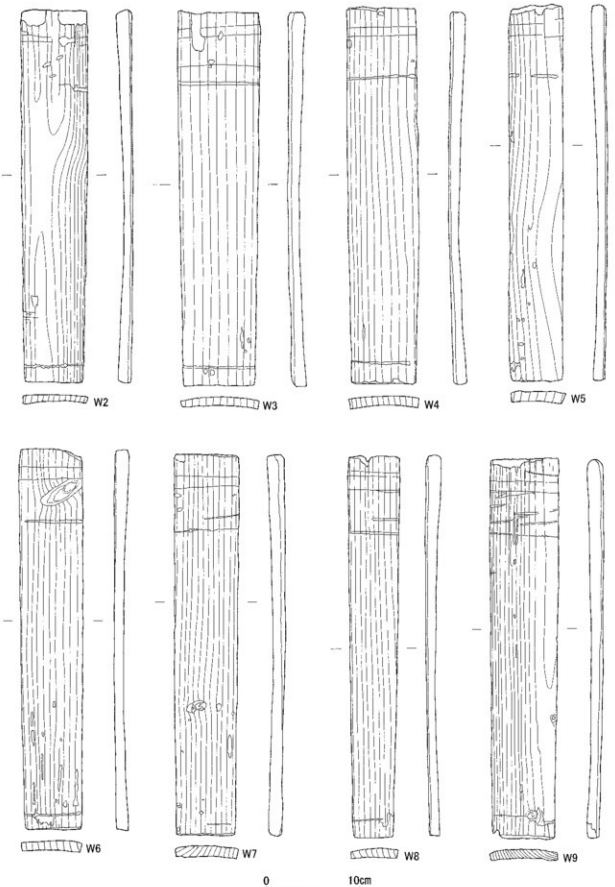


1 花崗土(客土)
2 7.5Y 5/1 緑灰　粘土
3 10YR 5/2 灰黄褐 砂混粘質土
4 5Y　8/1 灰白　細砂
5 10YR 6/2 灰黄褐 砂混粘土
6 10BG 4/1 暗青灰 砂混粘土
7 10G　6/1 緑灰　砂混粘土
8 5BG　6/1 青灰　砂混粘土

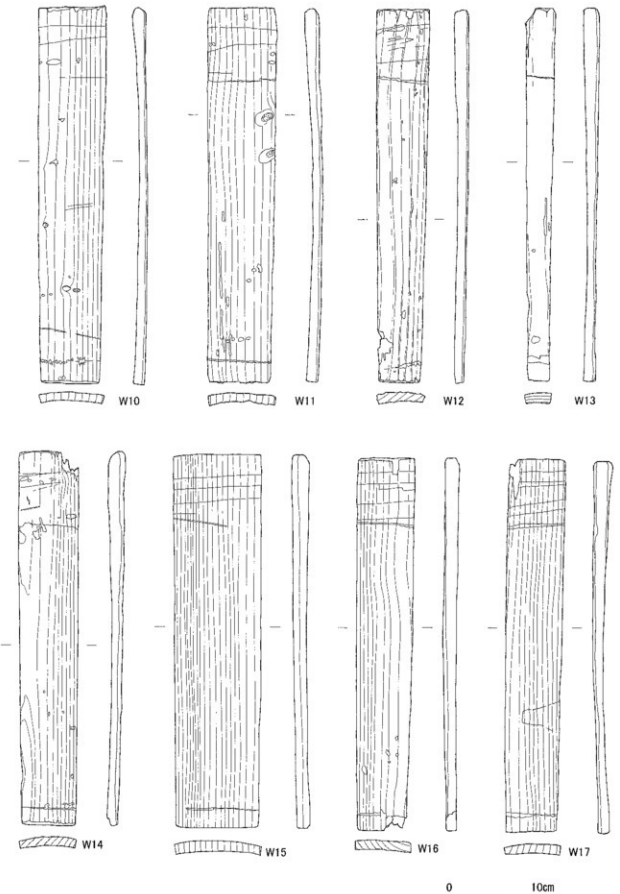
第22図　SE51001平・断面図



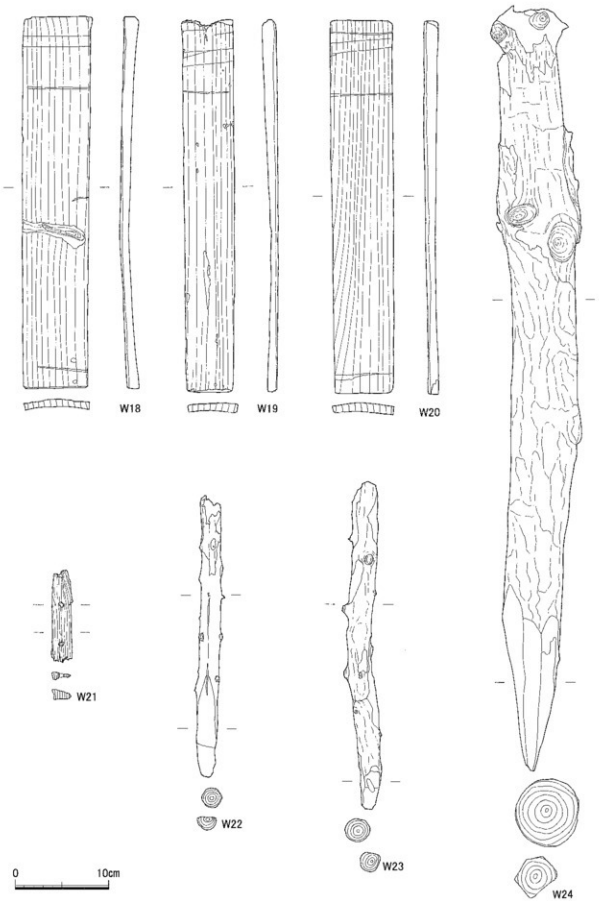
第23図　SE51001出土遺物実測図①



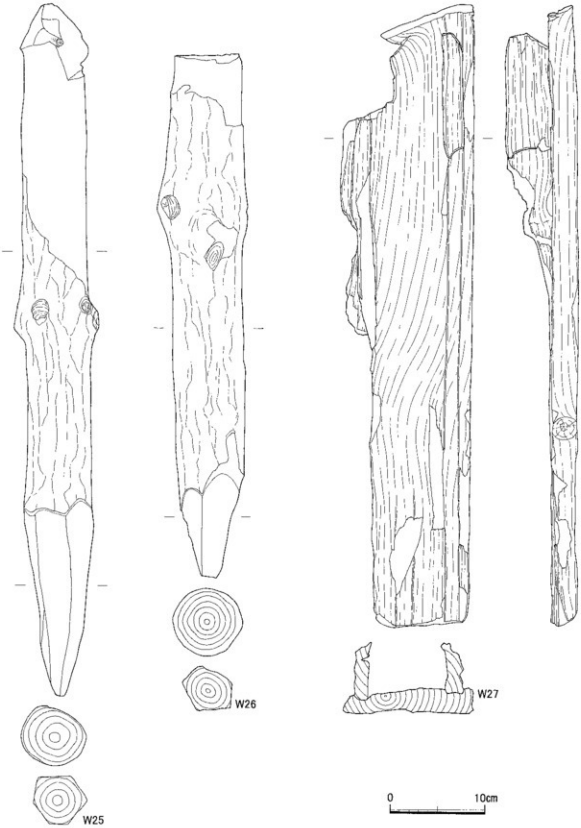
第24図　SE51001出土遺物実測図②



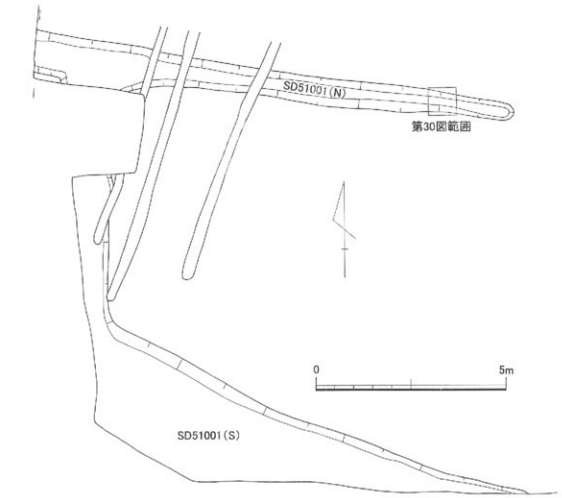
第25図　SE51001出土遺物実測図③



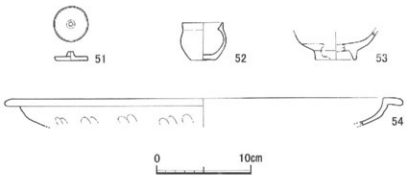
第26図　SE51001出土遺物実測図④



第27図　SE51001出土遺物実測図⑤



第28図　SD51001平・断面図



第29図　SD51001(N)出土遺物実測図

できる。第1層はにぶい黄褐色砂混粘質土，第2層はにぶい褐色細砂，第3層は灰黄褐色粗砂，第4層は褐灰色細砂～粗砂である。

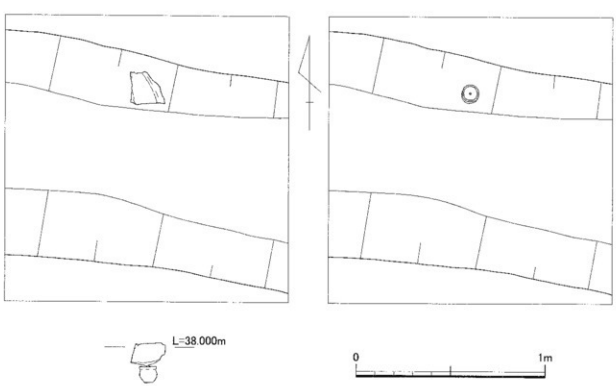
SD51001(N)出土遺物は第29図に掲載した。51・52は備前焼陶器の蓋と小壺の完形品である。53は肥前系陶器の碗である。54は土師質土器の焙烙である。

51・52の備前焼陶器の小壺及び蓋は，溝の東端付近で北岸をやや削りこむような状況で出土した。遺構検出時の平面においては確認できなかったが，その出土状況からピット等が所在した可能性も考えられる。小壺は蓋がされた状態で検出された。壺内には埋土の流れ込みによるものと推定される上が少量見られたのみで空である。小壺の上部に長辺20cmの安山岩の角礫を載せた状態で検出しており，地鎮等の目的で意図的に埋納されたと考えられる。

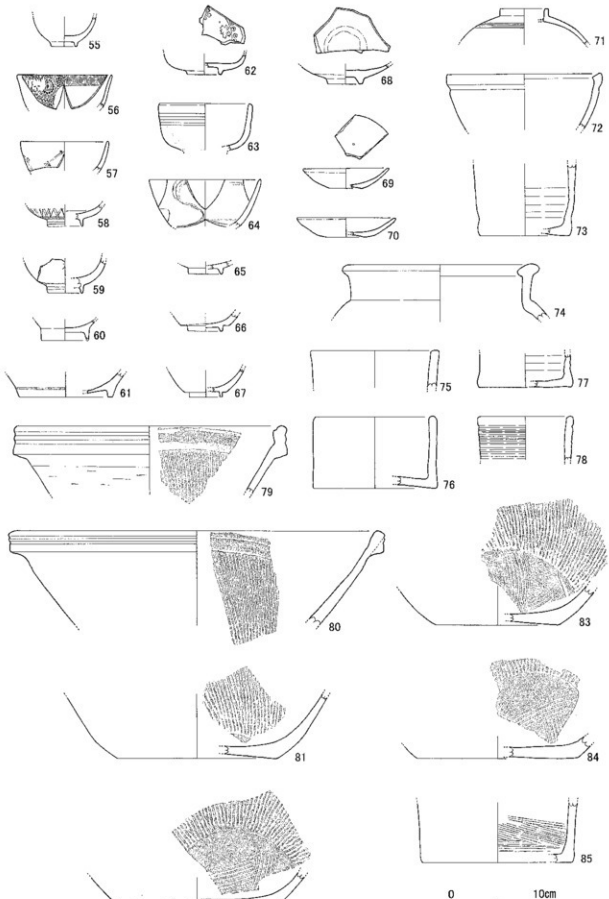
SD51001(S)は幅5.50m以上，検出長12.60m，深さ50cmを測る。断面形状は逆台形を呈し，埋土はSD51001(N)と同じ4層に分層できる。

SD51001(S)出土遺物は第31～33図に掲載した。55は肥前系磁器の小壺である。56は肥前系磁器の碗である。内外面とも型紙摺である。57は肥前系磁器の碗である。外面に草花文が施されている。58は肥前系磁器の碗である。外面に斜格子文と圏線，内面に圏線が施されている。59は肥前系磁器の碗である。外面に圏線3条が施されている。60は肥前系磁器の広東碗である。61は肥前系磁器の瓶である。内面無釉である。62は肥前系陶器の碗である。内面に陰刻による草花文が施されている。63は瀬戸美濃系陶器の碗である。64は瀬戸美濃系の陶胎染付碗である。65は瀬戸美濃系陶器の碗である。外面無釉，内面施釉である。66・67は京・信楽系陶器の碗である。高台無釉である。68は肥前系磁器の皿である。高台無釉で，見込みに蛇ノ目釉ハギが認められる。69・70は京・信楽系陶器の皿である。外面無釉，内面施釉で，69の見込みにはハリ支えの痕跡が認められる。71は産地不明陶器の蓋である。外面施釉，内面無釉である。72・73は産地不明陶器の鉢である。74は産地不明陶器の甕である。75～78は備前焼陶器の鉢である。79～84は明石焼陶器の擂鉢である。85は土師質土器の火鉢である。内面は粗いヨコハケである。86は土師質土器の風呂釜である。内外面に突帯を巡らせている。87～89は土師質土器の甕である。90～104は焙烙である。90～102は土師質，103・104は瓦質である。S12は凝灰岩製の石臼である。

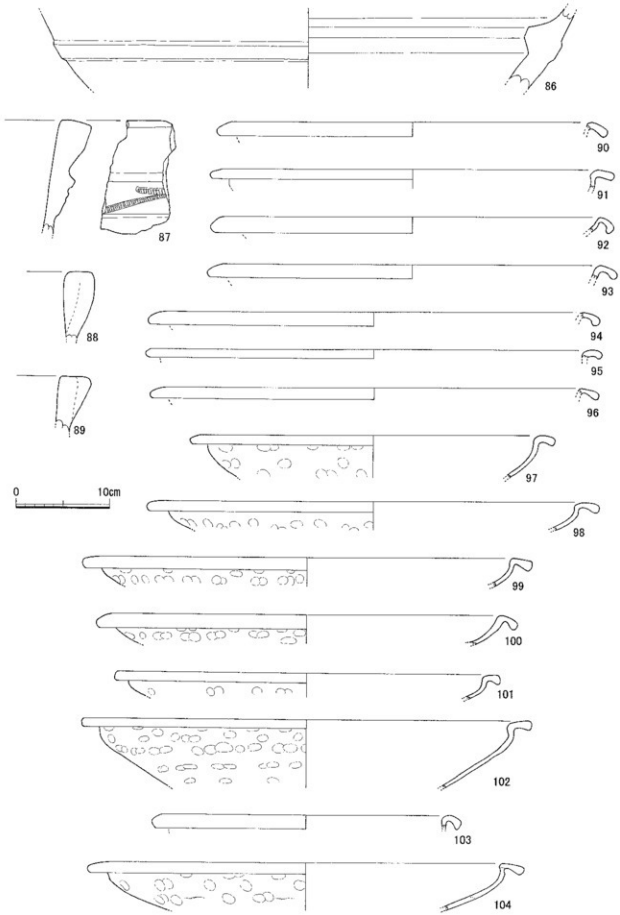
SD51001(N)・SD51001(S)ともに，18世紀～19世紀前半の遺物が主体を占めるが，56の型紙摺の肥前系磁



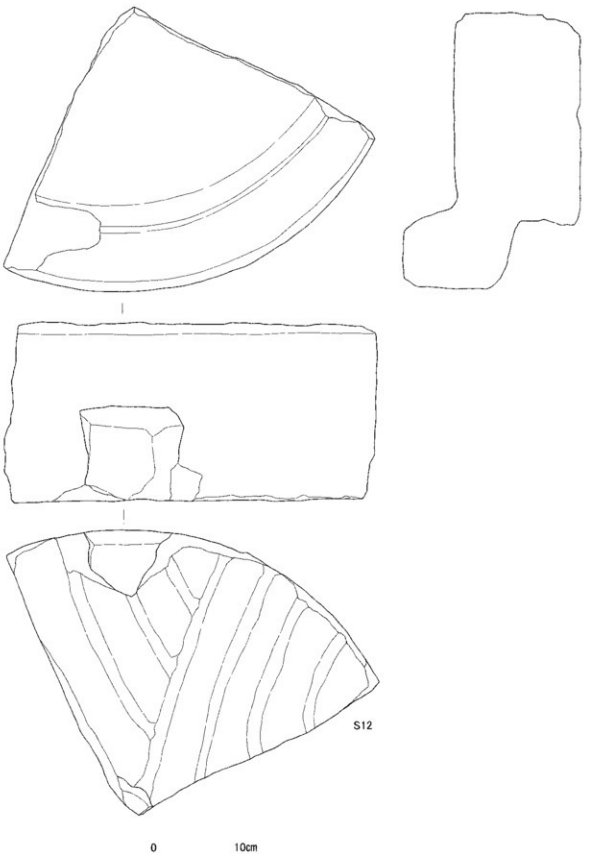
第30図　SD51001(N)土器出土状況図



第31図　SD51001(S)出土遺物実測図①



第32図　SD51001(S)出土遺物実測図②



第33図　SD51001(S)出土遺物実測図③

器碗が見られることから，最終埋没は明治期と考えられる。

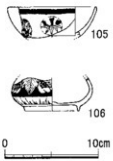
SD51002～51005（第5図）

調査区東部から中央にかけて検出した溝である。いずれも幅20～40cm，深さ5～10cmを測り，断面形態はU字を呈し，埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。SD51002～SD51004はほぼ並行して見られ，SD51005はこれらに直交しており，ほぼ同時期の溝群としてとらえることができる。

遺物は出土していないが，最終埋没が明治期と考えられるSD51001を切っていることから，明治期以降の遺構と考えられる。一方で，溝の主軸方位がSD51001(S)と平行ないし直交することから，SD51001埋没と時期差はそれほどないと推定できる。

ピット出土遺物（第34図）

ピットからも遺物が出土しているが，図示できたものは2点のみである。第34図に掲載した。105は瀬戸美濃系磁器の色絵碗である。106は肥前系磁器の色絵油壺である。ピット出土のものも18世紀～19世紀前半のものが主体を占め，一部明治期のものも見られる。



第34図　ピット出土遺物実測図

第4章　まとめ

奥の坊遺跡は，主に弥生時代中期前半の集落遺跡で，近世までの遺構・遺物が検出されている。南向きの緩斜面に営まれた集落のほぼ全域を発掘調査しており，今回の報告書では，その南西端部分しか紹介できていないが，本報告書で取り上げたⅤ区の遺構の変遷を考えたい。Ⅴ区においては，弥生時代中期前半，古代，近世以降の3時期の遺構・遺物が検出された。

弥生時代中期前半

奥の坊遺跡の最盛期にあたる弥生中期前半であるが，その遺構密度は他の調査区に比べ希薄である。東半が削平を受けていることが要因の1つと考えられる。当該期の遺構としては，土坑13基と方形周溝状遺構ST52001があるが，出土遺物も少なく，その実態は不明である。

奥の坊遺跡は，東から西に伸びる丘陵の南向きの緩斜面に立地しているが，さらに細かく見ると，丘陵から南へ派生する小さな2つの尾根に東西を挟まれた谷状部分が集落域となっており，Ⅴ区は西側の尾根の先

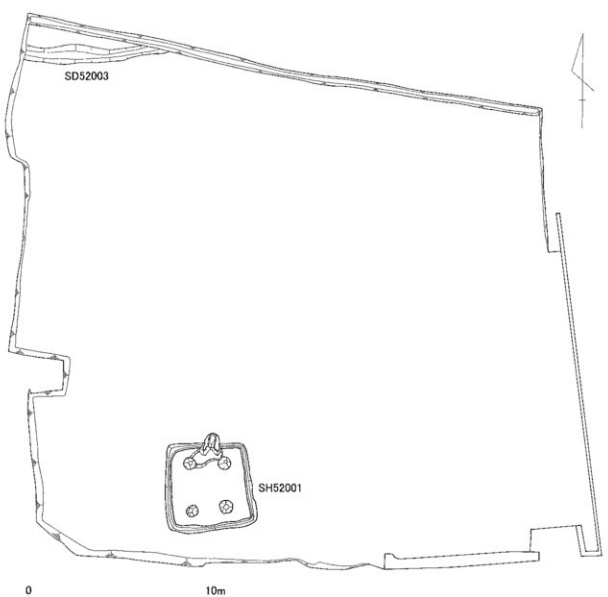
第35図　弥生時代中期前半の遺構平面図

端に位置する。これまでの発掘調査において，東側の尾根においては弥生時代の可能性が考えられる土坑墓が検出されており（大嶋2006），ST52001を方形周溝墓とするならば，集落の東西の尾根を墓域としていた可能性が指摘できる。

なお，V区の西側に隣接する奥の坊権現前遺跡V区において，遺構密度は希薄であるが当該期の竪穴住居跡が検出されている（大嶋2004）ことから，尾根を挟んだ西側にも一部集落域が拡大する。

古代

包含層中には一定量の土師器や須恵器が見られることから，古代の遺構が想定されるが，遺構から古代の遺物は出土していない。しかし，SD52003は東側に隣接する奥の坊権現前遺跡で検出した7世紀後半の溝SD53001の延長部分と考えられる。またSH52001は，弥生時代の遺物しか出土していないが，竈付きの竪穴住居であることから，当該期の遺構と考えられる。西側に隣接するII区及び東側に隣接する奥の坊権現前遺跡V区にかけて集落域が広がっていたことが判明した。

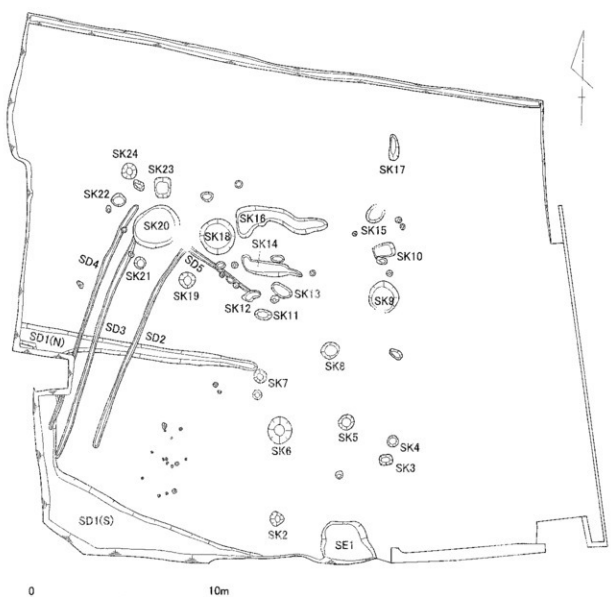


第36図　古代の遺構平面図

なお，今回の調査で検出した古代の遺構は，巨視的に見れば，約800～900m西側に所在する小山南谷遺跡や新田本村遺跡において検出しているN－5°－Eの方位の条里地割を基準としていると考えられる。同方位は山田郡の条里地割N－11°－Eと異なる異方位条里地割であることから，山田郡北部条里地割と呼称されている（藤好1997）。

近世以降

V区で最も多く遺構・遺物を検出した時期である。調査地には古高松村（現在の高松市高松町）の庄屋であった揚氏の山林を管理していた人物の家屋があったとの伝承がある。調査地内で，礎石や柱穴といった明確な居住遺構は検出されていないが，水溜め遺構SE51001や数多くの土坑の検出から屋敷地であったことが推定できる。また，SD51001(N)出土の備前焼小壺は，屋敷の地鎮に伴うものと推定できる。なお，土地区画の変遷から18～19世紀の遺物を含み明治期に最終埋没したと考えられるSD51001と，それを切ることから明治期と考えられるSD51002～SD52005の2時期に分類できる。SE51001をはじめ，土坑の多くは18～19世紀の遺物が出土しており，SD51001と同時期の遺構が主体を占めると考えられる。



※遺構番号省略
(例)SK51001→SK1

第37図　近世以降の遺構平面図

主要参考文献

大嶋和則 1999『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 奥の坊遺跡群Ⅰ』高松市教育委員会
大嶋和則 2000『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 川南・東道跡』高松市教育委員会
大嶋和則 2001『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 奥の坊遺跡群Ⅱ』高松市教育委員会
大嶋和則 2004『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 奥の坊遺跡群Ⅲ』高松市教育委員会
大嶋和則 2004『高松市指定史跡 久本古墳』高松市教育委員会
大嶋和則 2006『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 奥の坊遺跡群Ⅳ』高松市教育委員会
大嶋和則 2006『高松山東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 奥の坊遺跡群Ⅴ』高松市教育委員会
片桐孝浩 1994『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷遺跡 平成5年度』香川県教育委員会
片桐孝浩 1997『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
木下晴一 2000『県道高松志度線緊急整備工事および県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原中村遺跡』香川県教育委員会
篠本晋司・森下友子 1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会
菅榮太郎 1992「弥生時代の石器生産と流通 ―讃岐平野における一様相と近畿地域との関連性―」『同志社大学考古学シリーズ Ⅴ 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
中西克也 2006『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 新田本村遺跡』高松市教育委員会
古高松郷土誌編集委員会 1977『古高松郷土誌』
藤井雄三・山本英之 1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会
藤好史郎 1997「屋嶋城と城山城 ―古代山城研究の一視点―」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅴ 特集7世紀の讃岐』財団法人香川県埋蔵文化財センター
森格也 1995「高松平野における弥生時代の石器生産と流通」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会
山元敏裕 1995『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕・末光甲正 1999『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 川南・西道跡』高松教育委員会
山元敏裕 2003『史跡天然記念物屋島―史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ―』高松市教育委員会

観　察　表

表3　土器観察表

番号	器種	挿図	遺構名	法量(cm) 口径	底径	器高	外面	内面	色調 (上=外面、下=内面)	胎土	焼成
1	弥生土器 底部	6	ST52001		5.0	(6.5)	タテヘラミガキ	ナデ	5YR5/6 明赤褐 5YR4/3 にぶい赤褐	やや粗 4mm以下の石英・長石含む	良
2	弥生土器 広口壺	8	SH52001	8.6		(3.8)	マメツ	マメツ	7.5YR7/6 橙 5YR6/4 にぶい橙	粗 5mm以下の石英・長石含む	良好
3	弥生土器 広口壺	8	SH52001	12.7		(3.9)	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
4	弥生土器 広口壺	8	SH52001	16.4		(2.6)	指頭圧	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐 5YR6/6 橙	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良好
5	弥生土器 短頸壺	8	SH52001	20.2		(3.8)	ナデ	ヨコヘラミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
6	弥生土器 底部	8	SH52001		6.2	(2.7)	指頭圧 接合痕	指頭圧	7.5YR7/5 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3mm以下の石英・長石を含む	良
7	弥生土器 底部	8	SH52001		7.0	(1.9)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい橙	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
8	弥生土器 底部	8	SH52001		8.4	(2.7)	マメツ	マメツ	10YR8/6 赤褐 7.5YR4/2 灰褐	粗 4mm以下の石英・長石含む	良
9	弥生土器 底部	8	SH52001		10.4	(2.3)	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR6/3 にぶい褐	やや粗 2mm以下の石英・長石含む	良好
10	弥生土器 甕　底部	8	SH52001		7.6	(2.7)	ナデ	マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙 5YR6/6 橙	やや粗 4mm以下の石英・長石含む	良好
11	弥生土器 底部	8	SH52001		6.0	(4.4)	ナデ	ナデ	10YR3/1 黒褐 5YR5/6 明赤褐	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良
12	弥生土器 底部	8	SH52001		8.4	(3.3)	タテヘラミガキ	ナデ	5YR6/6 橙 7.5YR5/3 にぶい褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
13	弥生土器 底部	8	SH52001		5.8	(5.3)	タテヘラミガキ	ナデ	5YR5/6 明赤褐 10YR4/2 灰黄褐	やや粗 5mm以下の石英・長石含む	良
14	弥生土器 甕	12	SD52003	25.6		(8.8)	マメツ	マメツ	5YR7/6 橙 7.5YR8/8 黄橙	粗 5mm以下の石英・長石含む	良
15	肥前系磁器 碗	14	SK51009	10.2	4.0	5.8	区画文・圏線	圏線2条・文字	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
16	瀬戸美濃系磁器 碗	14	SK51009		4.6	(1.3)		砂目・草花文	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
17	産地不明陶器 鉢	14	SK51009	14.8		(2.5)	施釉	施釉	2.5Y6/4 にぶい黄 10YR6/2 灰黄褐	精良	良好
18	瀬戸美濃系陶器 碗	14	SK51009		6.4	(2.2)	施釉 陶胎染付	施釉 陶胎染付	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好
19	備前焼陶器 擂鉢	14	SK51009			(8.5)	ナデ	ナデ 擂目	10R5/6 赤 10R5/2 灰赤	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
20	肥前系磁器 盤	16	SK51014	9.4		(1.4)	草花文		N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
21	肥前系磁器 碗	16	SK51014	10.0	4.1	5.0	草花文・圏線3条		7.5GY8/1 明緑灰 N8/0 灰白	精良	良好
22	肥前系磁器 碗	16	SK51014		5.2	(2.0)	圏線1条	文字	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
23	肥前系磁器 徳利	16	SK51014			(6.8)	文字	無釉	7.5Y7/1 灰白 2.5Y7/2 灰黄	精良	良
24	産地不明陶器 甕	17	SK51016	21.9		(8.1)	無釉	無釉	2.5YR3/2 暗赤褐 2.5YR3/1 暗赤灰	精良	良好
25	土師質土器 焙烙	17	SK51016	53.0		(4.3)	ナデ スス付着	ナデ	N2/0 黒 7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良
26	肥前系磁器 碗	19	SK51018			(4.8)	草花文	圏線4条	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
27	瀬戸美濃系磁器 碗	19	SK51018	8.4	3.2	3.5	圏線3条・草花文	草花文	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
28	土師質土器 火鉢	19	SK51018	24.4		(5.0)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR5/3 にぶい褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
29	瓦質土器 焙烙	19	SK51018	36.7		(3.5)	ナデ	ナデ	5Y5/1 灰 5Y5/1 灰	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
30	土師質土器 甕	19	SK51018	(36.8)		(16.2)	ナデ	粗いヨコハケのちナデ	10YR4/2 灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	良
31	土師質土器 甕	19	SK51018		48.0	(16.4)	粗いハケ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/2 灰黄褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
32	土師質土器 甕	19	SK51018	73.0		(14.0)	ナデ 斜格子文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐 5YR5/4 にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
33	土師質土器 火鉢	20	SK51019	44.8		(5.2)	板ナデ	ナデ	5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐	やや粗 3mm以下の石英・長石含む	良
34	肥前系磁器 紅皿	23	SE51001	4.6	1.2	1.7	高台無釉・型成形		N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
35	肥前系磁器 碗	23	SE51001	10.0		(2.8)	圏線・一重網目	圏線・一重網目	10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好
36	肥前系磁器 碗	23	SE51001	11.2		(3.8)	圏線・一重網目	圏線・一重網目	5GY8/1 灰白 5GY8/1 灰白	精良	良好
37	肥前系磁器 碗	23	SE51001	10.0		(2.7)	草花文	圏線	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
38	肥前系陶器 碗	23	SE51001	9.0		(3.9)	施釉	施釉	10Y7/1 灰白 7.5Y7/1 灰白	精良	良好
39	肥前系磁器 碗	23	SE51001		4.3	(4.0)	区画文・圏線4条	重ね焼き痕 圏線・斜格子文	10Y7/1 灰白 10Y7/1 灰白	精良	良好
40	肥前系磁器 皿	23	SE51001	9.0	4.6	2.1	型成形	型成形 型紙摺	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
41	京・信楽系陶器 碗	23	SE51001		3.3	(1.2)	高台無釉	施釉	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白	精良	良好
42	京・信楽系陶器 皿	23	SE51001		5.0	(1.1)	施釉	施釉	10YR7/2 にぶい黄橙 2.5Y6/4 にぶい黄	精良	良
43	屋島焼陶器 土瓶	23	SE51001		7.2	(3.3)	無釉	施釉	5YR6/3 にぶい橙 5YR5/8 明赤褐	精良	良好
44	備前焼陶器 瓶	23	SE51001		6.0	(4.2)	無釉 窯記号	無釉	2.5YR4/4 にぶい赤褐 2.5YR4/4 にぶい赤褐	精良	良好

番号	器種	掲図	遺構名	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	外面	内面	色調 (上=外面 下=内面)	胎土	焼成
45	明石焼陶器 壺胎	23	SE51001	29.2		(3.7)	ナデ	ナデ 煤目	2.5YR5/4 にぶい赤褐 2.5R4/3 にぶい赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
46	明石焼陶器 壺胎	23	SE51001	30.8		(3.8)	ナデ	ナデ 煤目	10R6/4 にぶい赤褐 10R6/6 赤橙	やや密 3mm以下の石英・長石含む	良好
47	瓦質土器 火鉢	23	SE51001		21.4	2.5	ナデ	ナデ	N5/0 灰 N4/0 灰	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
48	瓦質土器 火鉢	23	SE51001			4.0	ナデ・型成形 格子文	ナデ	N3/0 暗灰 N3/0 暗灰	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
49	土師質土器 釜	23	SE51001		15.6	(11.3)	板ナデ	指頭ナデ 横ナデ痕	10YR4/2 灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
50	土師質土器 壺	23	SE51001	48.4		(8.2)	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
51	備前焼陶器 壺	29	SD51001(N)	3.7		0.9	無釉	無釉	10R4/6 赤 2.5YR5/8 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
52	備前焼陶器 壺	29	SD51001(N)	4.2	2.9	4.0	無釉	無釉	10R4/6 赤 2.5YR6/8 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良
53	肥前系陶器 碗	29	SD51001(N)		4.4	(2.9)	鉄釉・高台無釉	鉄釉	2.5YR5/2 灰赤 2.5YR5/2 灰赤	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
54	土師質土器 焙烙	29	SD51001(N)	38.2		(2.9)	ナデ	ナデ・指頭圧	10YR7/2 黒褐 10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
55	肥前系磁器 小皿	31	SD51001(S)		2.8	(3.1)			10Y7/1 灰白 10Y7/1 灰白	精良	良好
56	肥前系磁器 碗	31	SD51001(S)	10.0		(3.6)	型紙摺	型紙摺	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
57	肥前系磁器 碗	31	SD51001(S)	9.4		(3.1)	草花文		7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
58	肥前系磁器 碗	31	SD51001(S)		3.7	2.5	斜格子文・圏線4条	圏線1条	5GY8/1 灰白 5GY8/1 灰白	精良	良
59	肥前系磁器 碗	31	SD51001(S)		3.8	(3.6)	圏線3条		10GY8/1 明緑灰 10GY8/1 明緑灰	精良	良好
60	肥前系磁器 皿	31	SD51001(S)		(2.5)	(2.2)			10Y8/1 灰白 10Y8/1 灰白	精良	良好
61	肥前系磁器 瓶	31	SD51001(S)		10.0	(2.6)	圏線1条	無釉	7.5GY8/1 明緑灰 2.5Y8/2 灰白	精良	良好
62	肥前系陶器 碗	31	SD51001(S)		3.0	(2.2)	施釉 鉄彩	施釉	10YR3/2 黒褐 2.5YR5/2 にぶい赤褐	精良	良
63	陶芦美濃系陶器 碗	31	SD51001(S)	9.6		(3.0)	施釉	施釉	7.5YR5/4 にぶい褐 5Y7/2 灰白	精良	良好
64	陶芦美濃系陶器 碗	31	SD51001(S)	12.0		(3.0)	施釉	施釉	10YR7/1 灰白 7.5YR4/1 灰白	精良	良好
65	陶芦美濃系陶器 碗	31	SD51001(S)		3.5	(1.3)	施釉	施釉	10YR8/3 浅黄橙 2.5Y7/2 灰黄	精良	良
66	京・信楽系陶器 碗	31	SD51001(S)		3.6	(1.9)	高台無釉	施釉	2.5Y8/2 灰白 10YR8/3 浅黄橙	精良	良好
67	京・信楽系陶器 碗	31	SD51001(S)		3.6	(2.6)	高台無釉	施釉	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	精良	良好
68	肥前系磁器 碗	31	SD51001(S)		3.8	(2.1)	高台無釉	蛇ノ目釉ハギ	7.5GY8/1 明緑灰 7.5GY8/1 明緑灰	精良	良好
69	京・信楽系陶器 皿	31	SD51001(S)	9.2	3.4	2.1	無釉	施釉・ハリ支え	2.5Y8/2 灰白 5Y7/2 灰白	精良	良好
70	京・信楽系陶器 皿	31	SD51001(S)	10.6	4.0	2.0	無釉	施釉	5Y8/1 灰白 5Y7/2 灰白	精良	良好
71	産地不明陶器 壺	31	SD51001(S)	5.2		(3.6)	施釉	無釉	2.5Y2/1 黒 2.5Y4/4 にぶい赤褐	精良	良好
72	産地不明陶器 鉢	31	SD51001(S)	18.6		(5.9)	施釉	施釉	5Y8/4 淡黄 5Y8/4 淡黄	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
73	産地不明陶器 鉢	31	SD51001(S)		9.5	(7.5)	無釉	無釉	5YR7/4 にぶい橙 2.5YR5/3 にぶい赤褐	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好
74	産地不明陶器 壺	31	SD51001(S)	19.8		(5.8)	無釉	施釉	7.5YR5/3 にぶい褐 7.5YR4/3 褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
75	信楽焼陶器 鉢	31	SD51001(S)	6.8		(2.9)	ナデ	ナデ	2.5Y4/2 灰赤 10R5/4 にぶい赤褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
76	信楽焼陶器 鉢	31	SD51001(S)	12.7	13.0	7.5	ナデ 横目	ナデ	2.5Y5/4 にぶい赤褐 2.5Y5/6 明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良
77	信楽焼陶器 鉢	31	SD51001(S)		5.0	(3.6)	ナデ	ナデ	5YR6/3 にぶい橙 7.5YR5/3 にぶい褐	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
78	信楽焼陶器 鉢	31	SD51001(S)	9.6		(4.6)	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR5/3 にぶい赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
79	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)	28.6		(7.1)	ヨコヘラケズリのちナデ	ナデ 横目	2.5YR6/8 橙 2.5YR6/4 にぶい橙	密 1mm以下の長石含む	良好
80	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)	38.6		(5.0)	ナデ	ナデ 横目	10R4/1 暗赤灰 10R4/1 暗赤灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
81	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)		17.2	(8.7)	ナデ	ナデ 横目	10R5/6 赤 10R5/6 赤	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
82	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)		16.0	(4.0)	ナデ	ナデ 横目	2.5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/6 橙	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
83	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)		13.2	(4.1)	ナデ	ナデ 横目	10R5/6 赤 10R5/4 赤褐	やや密 2mm以下の石英・長石含む	良好
84	明石焼陶器 壺胎	31	SD51001(S)		17.2	(2.3)	ナデ	ナデ 横目	10R6/6 赤橙 10R6/6 赤橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
85	土師質土器 火鉢	31	SD51001(S)		16.0	(6.3)	ナデ	粗いヨコハケ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良
86	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)			(8.5)	ナデ	ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐 2.5YR6/4 にぶい橙	やや密 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良
87	土師質土器 壺	32	SD51001(S)			(12.0)	ナデ 斜格子文	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
88	土師質土器 壺	32	SD51001(S)			(17.0)	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙 5YR7/4 にぶい橙	密 1mm以下の石英・長石・雲母含む	良好

番号	器種	時期	遺構名	法量(cm) 口径	底径	器高	外面	内面	色調 (上=外面 下=内面)	胎土	焼成
89	土師質土器 皿	32	SD51001(S)			(5.6)	ナデ	ナデ スス付着	7.5YR4/4 褐 7.5YR4/4 褐	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良好
90	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	36.5		(1.5)	ナデ	ナデ	2.5Y5/2 暗黄灰 5Y5/1 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
91	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	43.2		(2.0)	ナデ	ナデ	7.5YR4/1 灰褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良好
92	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	40.0		(1.7)	ナデ	ナデ	N4/0 灰 N4/0 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
93	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	40.2		(1.5)	ナデ	ナデ	2.5Y2/1 黒 2.5Y4/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
94	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	44.6		(1.4)	ナデ	ナデ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y4/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
95	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	48.8		0.8	ナデ	ナデ	7.5R4/2 灰赤 7.5R4/2 灰赤	密 1mm以下の石英・長石含む	良好
96	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	44.1		(1.2)	ナデ	ナデ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y5/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
97	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	39.0		(4.6)	指頭圧	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	密 1mm以下の長石含む	良好
98	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	48.2		(2.9)	ナデ・指頭圧	ナデ	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y7/1 灰白	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石含む	良好
99	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	44.0		3.0	指頭圧	ナデ	N3/0 暗灰 5Y5/1 灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	不良
100	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	41.6		3.1	指頭圧・ナデ	ナデ	10YR3/2 黒褐 10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 1mm以下の石英・長石含む	良
101	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	40.0		(2.6)	指頭圧	ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐 10YR7/4 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
102	土師質土器 焙烙	32	SD51001(S)	47.5		(7.1)	ナデ・指頭圧	ナデ	5Y5/1 灰 5Y5/1 灰	密 1mm以下の石英・長石含む	良
103	瓦質土器 焙烙	32	SD51001(S)	31.0		(1.4)	ナデ	ナデ	N4/0 灰 N4/0 灰	密 1mm以下の長石含む	良好
104	瓦質土器 焙烙	32	SD51001(S)	49.4		(5.6)	指頭圧 櫛合痕	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐 2.5Y5/1 黄灰	やや密 1mm以下の石英・長石含む	良
105	瀬戸美濃系磁器 碗	34	ピット			(3.2)	色絵		N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好
106	肥前系磁器 碗蓋	34	ピット		5.9	(3.5)	色絵	無釉	N8/0 灰白 N8/0 灰白	精良	良好

表4　木器観察表

番号	器種	挿図	遺構名	法量(cm)			特徴
				長	幅	厚	
W1	板材	19	SK51018	5.3	3.6	0.9	わずかに加工痕あり。
W2	楯材	24	SE51001	39.2	7.2	1.8	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W3	楯材	24	SE51001	39.3	6.5	1.8	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W4	楯材	24	SE51001	39.4	7.5	1.9	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W5	楯材	24	SE51001	39.2	5.9	1.5	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W6	楯材	24	SE51001	39.8	6.7	1.5	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W7	楯材	24	SE51001	39.9	6.6	1.9	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W8	楯材	24	SE51001	40.0	5.3	1.7	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W9	楯材	24	SE51001	39.8	7.5	1.7	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W10	楯材	25	SE51001	38.7	7.4	1.6	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W11	楯材	25	SE51001	39.4	7.7	1.8	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W12	楯材	25	SE51001	39.1	5.7	1.6	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W13	楯材	25	SE51001	39.0	2.8	1.7	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W14	楯材	25	SE51001	39.3	6.3	1.8	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W15	楯材	25	SE51001	39.0	9.2	1.9	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W16	楯材	25	SE51001	38.8	8.2	1.6	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W17	楯材	25	SE51001	38.9	6.2	1.9	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W18	楯材	26	SE51001	39.1	7.7	2.1	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W19	楯材	26	SE51001	39.1	6.8	1.5	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W20	楯材	26	SE51001	39.1	6.8	1.5	外面上端と下端にタガ痕跡あり。
W21	板材	26	SE51001	9.7	2.3	1.1	2箇所に円孔あり。
W22	杭	26	SE51001	29.6	2.7	2.1	樹皮つき。先端は1方向より削る。
W23	杭	26	SE51001	34.3	4.3	2.5	樹皮つき。先端は1方向より削る。
W24	杭	26	SE51001	80.0	8.1	4.4	樹皮つき。先端は五角形。
W25	杭	27	SE51001	72.3	8.9	6.3	樹皮つき。先端は六角形。
W26	杭	27	SE51001	59.9	9.6	7.1	樹皮つき。先端は五角形。
W27	樋	27	SE51001	65.0	14.1	7.6	側板を組み合わせる。

表5　石器観察表

番号	器種	挿図	遺構名	法量(cm)			石材	特徴
				長	幅	厚		
S1	石鏃	9	ST52001	1.8	2.0	0.4	サヌカイト	凹基式。先端部を欠く。両面より細かく調整。
S2	石鏃	8	SH52001	1.8	1.8	0.4	サヌカイト	凹基式。先端部を欠く。両面より細かく調整。
S3	石鏃	8	SH52001	2.4	1.2	0.4	サヌカイト	完形品。平基式。両面より細かく調整。
S4	石鏃	8	SH52001	3.2	1.6	0.3	サヌカイト	凹基式。先端部を欠く。両面より細かく調整。
S5	削器	8	SH52001	3.5	3.9	0.8	サヌカイト	全体に白色風化。刃部は片面より調整。
S6	削器	8	SH52001	3.6	3.1	0.9	サヌカイト	背部・刃部とも両面より調整。
S7	敲石	8	SH52001	9.0	6.6	4.7	閃緑岩	3面に敲打痕あり。
S8	砥石	19	SK51018	5.9	5.4	2.5	砂岩	擦痕あり。
S9	磨	23	SE51001	15.7	8.0	2.6	凝灰岩	被用痕あり。
S10	磨	23	SE51001	6.0	6.1	2.2	凝灰岩	一部のみ残る。
S11	砥石	23	SE51001	12.5	8.0	4.1	砂岩	側面も使用。
S12	石臼	33	SD51001(S)	21.0	14.9	9.3	凝灰岩	溝あり。

表6　鉄器観察表

番号	器種	挿図	遺構名	法量(cm)			特徴
				長	幅	厚	
K1	鏃先	14	SK51009	15.5	2.2	1.1	鉄製鏃具。
K2	針金金具	23	SE51001	8.3	0.9	0.6	断面方形。
K3	鉇丁	23	SE51001	17.3	3.9	1.9	木製の柄残る。

写 真 図 版

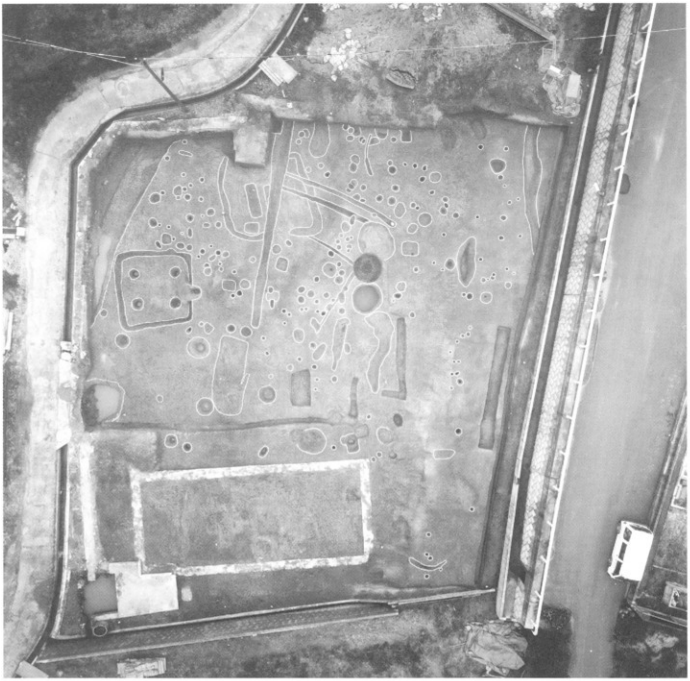


写真1　奥の坊遺跡Ⅴ区空中写真

写真２　Ｖ区北壁土層断面(西から)

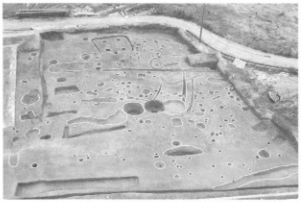


写真３　Ｖ区第2遺構面完掘状況(北から)

写真４　ST52001全景(北から)

写真５　ST52001検出状況(西から)

写真６　ST52001第2主体部検出状況(南から)

写真７　ST52001主体部検出状況(西から)

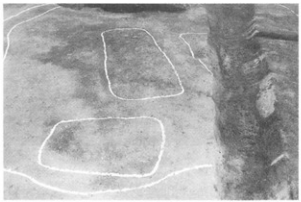


写真８　ST52001主体部検出状況(東から)

写真９　ST52001完掘状況(南西から)

写真10　ST52001完掘状況(西から)

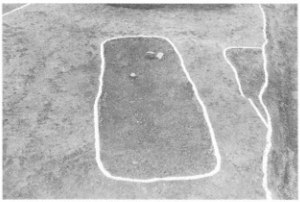


写真11　ST52001第2主体部完掘状況(東から)

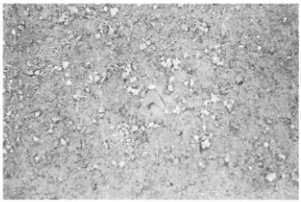


写真12　ST52001第2主体部石鏃検出状況(東から)

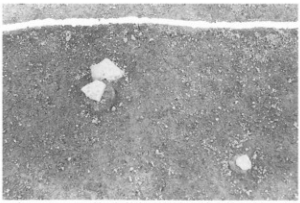


写真13　ST52001第2主体部土器出土検出状況(南から)

写真14　SH52001検出状況(南東から)

写真15　SH52001土層断面(南から)

写真16　SH52001完掘状況(南東から)

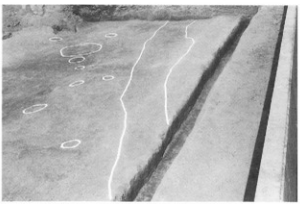


写真17　SD52001検出状況(東から)

写真18　第1遺構面完掘状況(北西から)

写真19　第1遺構面完掘状況(北東から)

写真20　第1遺構面完掘状況(北から)

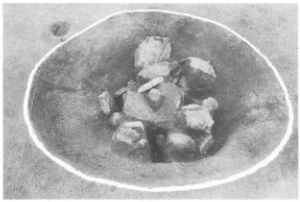


写真21　SK51006遺物出土状況(東から)

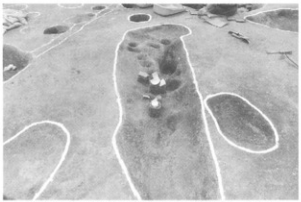


写真22　SK51014遺物出土状況(東から)

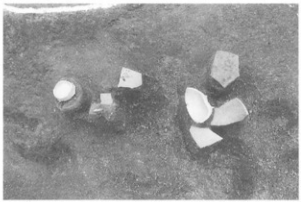


写真23　SK51014遺物出土状況(北から)

写真24　SK51014完掘状況(東から)

写真25　SK51016完掘状況(北から)

写真26　SK51018遺物出土状況(南西から)

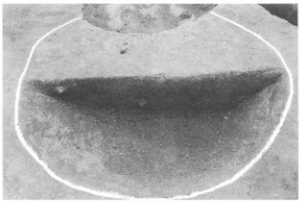


写真27　SK51009土層断面(北から)

写真28　SE51001完掘状況(東から)

写真29　SE51001完掘状況(西から)

写真30　SE51001木樋検出状況(西から)

写真31　SE51001桶検出状況(北から)

写真32　SD51001(S)完掘状況(東から)

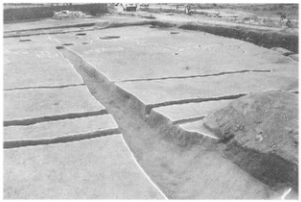


写真33　SD51001(N)完掘状況(西から)

写真34　SD51001(S)調査風景(東から)

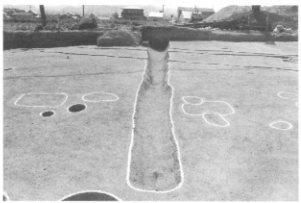


写真35　SD51001(N)完掘状況(東から)

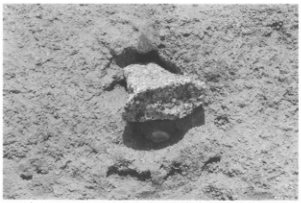


写真36 SD51001(N)小壺・礫検出状況(南から)

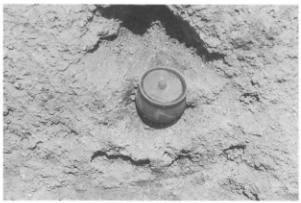


写真37　SD51001(N)小壺検出状況(南から)

写真38　SD51001(N)小壺蓋取り上げ状況(南から)

写真39　調査風景(東から)

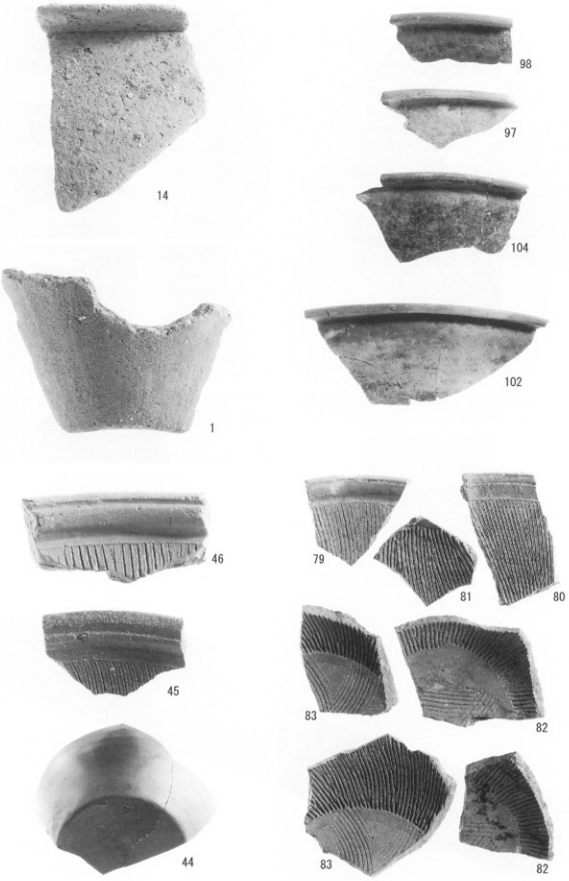
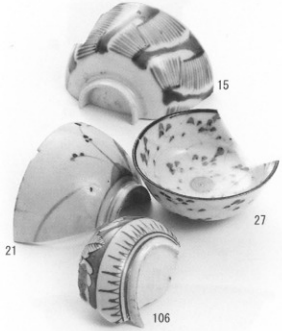


写真40　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物①



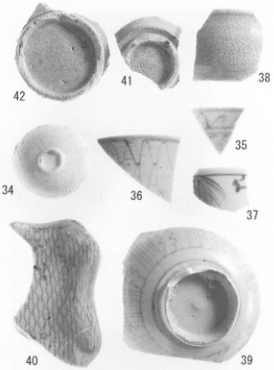


写真41　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物②

S2

S7

S1

S3

S12

S4

S8

S11

写真42　奥の坊遺跡Ⅴ区出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	おくのぼういせきぐんVI（おくのぼういせきVく）
書名	奥の坊遺跡群VI（奥の坊遺跡V区）
副書名	高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第6冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第108集
編著者名	大嶋 和則
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2636
発行年月日	西暦2007年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おくのぼういせき 奥の坊遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 たかまつちょう 高松町	37201		34° 19′ 30″	134° 07′ 30″	1999. 5. 28 ～ 1999. 7. 13	700㎡	高松市東部運動公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥の坊遺跡	集落	弥生	方形周溝墓 土坑	弥生土器，石器	
		古代	竪穴住居跡 溝	土師器，須恵器	
		近世	土坑 溝	陶磁器	

要約

奥の坊遺跡は高松平野の東を画する丘陵部に所在する。南向きの緩斜面に営まれた弥生時代中期前半の集落跡で，古代や近世の遺構も見られる。本書では，遺跡南西端のV区を報告した。V区では方形周溝墓1基を検出した。古代では，山田郡北部のみに見られる異方位条里地割を検出したほか，竈付きの竪穴住居跡1棟を検出した。近世では，水溜め用の施設や溝等を検出した。

高松市東部運動公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第6冊

奥の坊遺跡群Ⅵ

（奥の坊遺跡Ⅴ区）

平成19年11月30日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　有限会社　河端商会